
魔術師と生き人形

芳野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師と生き人形

【Nコード】

N6709V

【作者名】

芳野

【あらすじ】

川で溺れて死んだはずの女は、別の世界で生き人形として蘇った。彼女を助け、生き人形にしたのは病弱な魔術師。心まで人形に近づく女と、それを観察する謎の男。魔術師と生き人形の奇妙な生活が始まった。

水死

飲み込まれるのは一瞬だった。

川の深みに落ちた子供を助け、近くにいた父親とおぼしき男に渡し、自分も岸に上がろうとしたところで女は足を滑らせた。急流に足を取られ、体勢を立て直そうとする努力も空しく、女はあつという間に水の中に飲まれてしまった。先ほどの子供とその両親の悲鳴が、女の耳にもうつすらと聞こえた。

前日に雨が降ったせい、川の水量はかなり多かった。不運にも、女が落ちたのは子供が落ちたよりも遙かに深いところだった。女は川底に足をつけることも、岩や木につかまることがかなわず、そのまま下流に流されていった。

女は何か浮かび上がろうともがいた。しかし、思いとは裏腹に彼女の体は沈んでいった。何とか泳ごうとして腕と足を曲げ伸ばしようとするが、ジーンズと長袖の上着が水を吸って女の体に重くまとわりつき、思うように体は動かなかった。何でこんな格好をしてきたのだろう！日焼け防止と虫除けのための服装が仇となってしまったと、女は自身の不運を呪った。女は水泳にはそれなりに自信があった。しかし、息が続かなくなり、口や鼻から水が容赦なく入り込んでくると、不幸を嘆く余裕も消えた。水面に向かって手を必死に伸ばし、空気を求めてもがいた。夏の空の鮮やかな青色と川岸の木々の深い緑色が時々女の目に写る。パニックによってむやみに体を動かしたことで、女の体は更に水面から離れた。夏とはいえない川の水も、女の体力と精神力を急速に奪っていき、女はついにものがくことすらできなくなった。

ここまで、なのだろうか。

水は女の気管に容赦なく入り込み、女の意識までも徐々に奪って

いった。苦しさと死への恐怖が女の感情を支配していた。脳裏にそれまでの人生が浮かぶ。ごく普通の人生、不幸もそれなりにあったはずなのに、思い浮かぶのは幸せなものばかりだった。……子供を助けて死ぬなんて、平凡な私にそぐわないドラマチックな死に様だ。死にたくないなあ、でも、私が死んでも悲しむ人ももういないから、いいか……薄れゆく意識の中、女は心の中でつぶやいた。

??死にたくない?

突然、聞こえた男の声に、女は少しだけ意識を取り戻した。

そりゃあ、死にたくない。この状況でそう思わない人はいないだろう。女は心の中でつぶやいた。

??何を失っても?

いいよ、生きられるなら、助かるなら何だってする、女は心からそう思った。

??ならば、こちらに来るんだ。

女が目を開けると、緑色の水面から白い手が差し出されているのが見えた。

最後の気力をふり絞って、女は手を伸ばした。

水死（後書き）

初投稿です。不備などありましたらご連絡いただけるとうれしいです。

目覚め

頬に柔らかなものが触れたので、女は無意識に手でふり払った。しかし、再び柔らかいものが頬に当たる。ぺちぺちと、今度は一度でなく、何度も繰り返して頬を叩く。その感触に、女は意識を取り戻した。

「ぎゃっ！」

目を開けた女が最初に見たのは、自分を至近距離から見つめる白い猫だった。女は悲鳴を上げると同時に、反射的に猫を突き飛ばした。ふぎゃあ！という悲痛な鳴き声が部屋に響いた。しまった、やり過ぎた。女は急ぎ身を起こし、払い飛ばしてしまった猫を見やった。

すぐ側の床に立ち上がった猫は、怒りをたたえて女をにらみ返してきた。白と黒のストライプ模様が美しい、やや大柄な猫だった。長毛の毛並みがふさふさとゆれて、何とも愛らしい。「ごめんなさい！」と女は謝罪の言葉を発したものの、どうしたらいいかわからず、殺気立っている猫を見ていた。猫と女はしばらく見つめ合っていたが、やがて猫はふいっと顔を背けて、開いていた窓から出て行ってしまった。

女はため息をついて、寝台から降りた。部屋を見回して、女は困惑の表情を浮かべた。部屋は質素で、女の寝ていたベッドとテーブルセット、小さなタンスがあるだけだった。床も壁もむき出しの石材で出来ており、壁にはクロスすら張っていない。それなりの広さはあるが、殺風景な部屋だった。

ここはどこだろう？ 自室ではもちろんないし、明らかにホテルや病院の類でもない。女は混乱したまま部屋の中を観察した。ベッドやテーブルは飾り気のない質素な木製。テレビやパソコンといった電化製品は見当たらず、天井にはライトすらない。明かりは窓から差し込む日差しだけだが、開け放たれた窓にはカーテンすら掛かっ

ていない。古めかしい造りの窓に近寄って外を眺めると、女は更に混乱した。そこには延々と草原が広がっていて、町並みはかすかにさえ見えなかった。遠くには切り立った山脈が連なり、その頂は白く縁取られて日の光に照らされていた。

「どこ、ここ……」

「僕の屋敷、一般にはエヴァレット城と呼ばれてる」

一人つぶやいた言葉に対する思いがけない返答に、女は弾かれたように振り返った。

ドアから入ってきた若い男は、女を見るとニコリと笑い、言葉を続けた。

「そして、これから君が暮らす場所でもある」

人形

「はあ？」思いがけない男の言葉に、女は思わず素っ頓狂な声を上げた。

「私がここで暮らす？」

「そうだよ。まあ、とりあえず座って」

男は頷くと、テーブルを指さして女に座るよう促した。女が困惑の表情を浮かべたままテーブルに着いたのを確認すると、男は廊下から小さなワゴンを押して部屋の中に入れ、ドアを閉めた。

窓から差す日光が男の姿をはっきりと照らし出した。身長は180cmほどであろうか、背は女に比べると大分高いが横幅は細い。もやしとでも形容するのがぴったりで、ひょろりとして青ざめているのかと思うくらい肌の色も白い。男は膝丈の茶色い上着を羽織り、その下には質素なシャツとズボンを身につけていた。上着にはフードがついており、これをかぶってしまえばおそらく顔は見えないだろう。女はまるで強盗か痴漢の手配写真のような姿だと思った。年は若そうに見えるが、髪は老人のように白い。髪と同じく白い眉は凛々しく、瞳は鮮やかな緑色をしており、高い知性を感じさせた。口元には笑みを浮かべ、服装の怪しさとは逆に、人好きのする印象を与えた。女は男の視線に薄ら寒いものを感じ、不安を覚えた。しかし同時に、この人物が自分にとって危険ではないとなぜか確信していた。

ワゴンにはティーセットが載せられおり、男は手慣れた様子で茶を注いだ。二人分のカップをテーブルに置き、女と向き合う形で席に着いた。

「さて……、どこから説明したらいいかな」男はカップを取り上げて、口元まで寄せると女に話しかけた。

「アヤも飲みなよ。あまりおいしくはないかもしれないけど」

アヤと呼ばれた女が驚きのあまり立ち上がると、イスがガタンと

派手な音を立てて後ろに倒れた。男は女の様子を見つつ、カップの中身を一口だけ飲んだ。

「何で私の名前……!」

アヤは驚愕と恐怖がないまぜになった表情で、瞬きもせず男を見つめた。その目からは男への嫌悪感と不安がはつきりと見て取れた。「落ちていて、とにかく座りなさい」

男はカップをすすりながらアヤに告げた。

「そんなこと! 何で私の名前知ってるの! どうして私はここにいるの? 大体あんた誰? 何で私がここで暮らさないといけないのよ!」

堰を切ったように大声を張り上げ、アヤは男に詰め寄った。男はアヤを一瞥するともう一度座るように勧めた。しかし、すっかり興奮してしまったアヤは男を問い詰めることをやめられなかった。

「大体人をこんなところに連れ込んで、ただで済むと思ってる? 誘拐? 拉致? 一体なんなの? お願いだから私を家に帰して!」

男は叫ぶアヤを静かに見つめ、彼女が喋るのに任せた。アヤは一通り思っていることをまくし立てたが、やがて男が何も言わないのに気づき、なぜ答えないのかと再び叫び始めた。男は興奮したアヤに冷ややかな視線を送り、ほんの一言だけ発した。

「もう一度言う、座れ」

その言葉を聞いた瞬間、アヤの興奮はあっという間に静まった。自分としてはならないことをしてしまった、彼女はなぜかそう思い、同時に強い恥ずかしさと後悔を感じた。誘拐犯を罵っただけなのだから、こんな風に考える必要はないのに、アヤは思考と矛盾する自分の心境に戸惑った。「申し訳ありません」と言いたいのを必死に押さえ（なぜ私が謝罪しなければならない! 被害者は私だ!）、倒れたイスを直して座り直した。アヤは自分の心が理解できなかったが、その戸惑いを目の前の男に知られたくなくて、何とか平静な表情を取り繕った。

「……話を続けて良いかい?」

アヤが男の言葉に頷くと、男はカップを置いて話し始めた。

「単刀直入に言う。アヤ、君は死んだ」

アヤは男の言葉にぎょっとして、反射的に叫んだ。

「私は生きてる！何言ってるのよ」

男はアヤを見据えたまま答えた。その視線にアヤは再び薄ら寒いものを感じた。

「どうやら君の記憶は少し混乱しているようだ。君は川で子供を助け、溺死した。しかし、何を捨てても生きたいと僕に願った。だから僕は君を助けた」

アヤの脳裏に、濁流に飲まれた時の記憶が蘇った。冷たい水、苦しい息、届かない水面……

「た、確かに川で溺れた！でも、私、こうして生きてる。大体死んだのに助けたって矛盾してる！」

「あの水の中で、君は一度死んだ。死ぬ直前、君は何をしても生きたいと願い、僕の手を取った」

アヤは青ざめた顔で男の手を見つめた。この手は、あの時の手だ。

「僕はこちら側に運び込んだ君の死体と魂を加工し、君を生き人形として蘇らせた」

人形って、何よ、それ。

「君の体組織を加工して、こちらでの生存に適した形にカスタマイズさせてもらった。……そうだな、脈を取ってみると良い。君の心臓はもう動いていないから」

「まさか！」

アヤはそう叫ぶと、己の手首を必死に探った。しかし、脈は本当に見つからない。

「実は呼吸も必要ないんだ。無意識にやってるみたいだけど、息をしなくても大丈夫だよ」

私は死んで、人形になった？何それ？

「多少は理解してくれたかな？」

呆然としているアヤに男が声をかけた。

「急激な身体の変化に、精神がついて行かないってのはよくあることだ。今日はもう休むと良い。また明日話そう」

男はそれだけ言うと、立ち上がり、ティーセットを再びワゴンに載せ、ドアの方へ歩き出した。

「待つ……」アヤは立ち上がり呼び止めようとしたが、強烈なめまいに襲われてしまい、もう一度座るしかなかった。

「まだ体に慣れていないんだ。しばらくは休むように」

男はそれだけ言うと、そのまま部屋を出て行ってしまった。

アヤは追いかけてようとしたが、体の気だるさとめまいは止まらなかった。彼女は仕方なくベッドに潜り込んだ。

眠りに落ちる前、彼女はもう一度脈を探した。手首にも首筋にも脈動を感じることは出来なかった。次に息を止めた。枕で口と鼻を塞ぎ、頭の中でカウントする。100、200、300……カウントがいくつ進んでも、アヤが息苦しさを感じることはなかった。

女は、自分が人ではないものになったことを理解した。

異変

「……何でこの女は枕を顔の上に載せて寝ているんでしょうねえ」
女の声が聞こえて、アヤは目を覚ました。

「ええ、昨日は普通でしたよ。向こうではそうなんですかね？」
「馬鹿そうな寝顔が見えなくていいってことかもしれませんねえ」
会話をしているようだ。しかし、一人の声しか聞こえない。誰だろう、この声は？アヤはぼんやりと考えるが、声の主に思い当たる人物はいなかった。目を開けると、顔の上に枕が載っているのに気づいた。昨夜、口と鼻を塞いで息を止めていて、そのうちに眠ってしまったのを思い出した。そして、自分の置かれた非常識な状況을思い出した。

私は死んで、どこかに連れてこられて、人形になった。

こんな状況に自分が巻き込まれるなんて、枕を顔に載せて眠っていたのと同じくらい間抜けで滑稽だ。アヤは自嘲した。声の主はおそらくこの屋敷の人間だろう。昨日の男は城と言った。まさか一人ではあるまい。そう考えて、アヤはもう一眠りしたい気になっていた。体は気だるく、重い。彼女を取り巻く状況は、彼女の理解を既に超えていた。悪い冗談、こんなことがある訳がない。アヤの理性は未だそう捉えていたが、なぜか感情ではこの異常な自体を受け入れていた。なぜだろう、と彼女は思った。まるで体と頭が別々の物のようだ。もう一眠りして目を覚ましたら、自分の家にいるのではないかと思い、アヤは再び目を閉じた。

しかし、二度寝はすぐに妨げられた。顔の上の枕が取り払われ、日の光が彼女の顔を照らした。

目を開けると、また猫が目の前にいた。今度は彼女の体の脇にちょこんと座っていた。しかし、猫よりもベッドの脇にいる人影に気

を取られ、彼女はとっさに動くことができなかった。

その人影には、顔がなかった。

眠気は一気に消えた。アヤは跳ね起きると、人影から逃げるようにベッドから飛び降りた。影はフードのついた黒いローブを着ており、起き上がったアヤからはその顔は見えなくなった。恐怖と驚愕で怯えていたアヤだったが、自分の見たのは見間違えだったのかと思ひ、そっと、もう一度顔をのぞき込んだ。

やはり、顔はなかった。その顔はのっぺりとしていて、本来なら目や口があるはずの場所にも何もなかった。怯えて凍り付いていたアヤに、そのヒト？は目もくれず、廊下から部屋の中へ何かの入った籠を運び入れていた。アヤはそっと声をかけてみたが、それは何の反応も示さなかった。全ての籠をベッド脇に積むと、それは一言も発さないままさっさと出て行ってしまった。

さっき喋っていた女は今のじゃないの？アヤの頭は混乱した。

ふと視線を下げると、ベッドの上では猫がアヤを見つめていた。まるで狼狽する彼女を観察し、あざ笑っているかのように見えた。アヤも猫を見つめ返した。しかし、猫の方は彼女に対する興味を失ったように目をそらし、窓辺から外へと行ってしまった。アヤは部屋に一人残された。

よく分からない世界で、よく分からないことが起こるのは仕方がない。気を取り直して、アヤは先ほど運び込まれた籠をのぞき込んだ。

「あ、私の服」

一つの籠に、見慣れたジーンズとシャツ、それに下着が入っていた。それは間違いなく彼女の物で、彼女が溺れた時に着ていた物だった。服は綺麗に洗われ、丁寧にたたまれていた。

その他の籠も順に見ていったが、中に納められていたのはシーツやタオル、石けんといった日常に使う雑貨の数々だった。

「ここで、暮らす……」

アヤは前日に男に言われた言葉を思い出した。生活用品が運びこまれたのは明らかにそのためだった。怪しげな男、顔のない黒服、口の悪い女、そして愛想のない猫……先のことを考えると気が滅入るばかりだった。

とりあえず顔でも洗おう、そう呟き、彼女はさっそく差し入れられたタオルを手に、洗面台に向かった。部屋には廊下へと続くドアの他に、もう一つ扉があった。その向こうには洗面台と浴槽が置いてある小部屋があった。

洗面台の脇には水差しが置かれていた。おそらく先ほどの黒服が用意してくれたのだろう。水差しには適度な暖かさの湯がたっぷり入っていた。栓をした洗面台にその湯を流し入れ、アヤは顔を洗った。寝汗を流すと、アヤの憂鬱は少しだけ晴れたような気がした。顔を拭き、ふと、洗面台の鏡を見て、彼女は自分がコンタクトを外していないことに気づいた。二日入れっぱなし？ まずい、早く外さなければ……目の状態をチェックしようと思鏡をのぞき込んだ。

「あれ、コンタクト、ない……」

まぶたを裏返しても、目玉をぐりぐりと動かしてみても、レンズは見つからなかった。レンズを長時間入れていれば目は充血するはずだが、両目とも充血もなく、疲れ目や違和感も感じなかった。

「目が、見えている？」

アヤはかなり強度の近視で、裸眼で生活することなどあり得なかった。川で溺れた時も、彼女は確かにコンタクトレンズを入れていたはずだった。そのため、自分が眼鏡もコンタクトもない状態であることに驚いた。これは、カスタマイズとやらの影響なのだろうか。思いがけない奇跡に、アヤの心は踊った。しかし、他の部分も大幅に改造されているかもしれないことに思い当たり、アヤの背筋は凍った。

アヤは眼球を観察するのをやめ、鏡に映る自分の姿をおそるおそる確認した。

肩まである黒髪は記憶のままで、顔はあまり変わっていない。それどころか、以前より心なしか元氣に見えた。常態化していた目の下の隈が消え、顎にあったはずの吹き出物もすっかり治っていた。視線を体に移し、ふと、自分が見慣れぬ服を着ていることに気づいた。模様も飾りもない、膝丈で半袖のベージュ色のワンピース。ワンピースと言うよりは、病人が手術の前後に着るような簡素な服だった。よくよく見れば、下着も身に着けていない。思えば、目覚めた時からずっとこの服を着ていた。下着も、多分着けていなかった。どうして目のことにも、服のことにも気がつかなかったのだろう、大体ブラはともかく、パンツ履いてないのに気づかないってないよなあ。アヤは自分の間抜けさに呆れた。この服、誰が着せたんだろう？元の服を脱がしたのは？ふと考えて、アヤは赤面した。

服を脱ぎ捨て、氣を取り直す。体の前面にも背面にも、目立った傷やあざはなかった。あの激流に飲まれて、怪我一つしていないというのは奇妙なことだった。目と同じく、こちらも治してくれたのかもしれない。

体中を一通りチェックしてみて、とりあえず目立つ異変がないことにアヤは安堵した。アヤはベッドのある部屋へと戻り、元着ていた服を一式を取り出して身につけた。

「あれ？」

アヤは服が若干自分のサイズと合っていないことに気づいた。下着も、若干緩い。洗濯で伸びてしまったのだろうか。彼女は元の世界の服はもうこれしかないのにと不満を感じたが、安物だし仕方ないかとすぐに思い直した。

「さあ。あの人に会いに行かなきゃ」

身支度を終えたアヤは、廊下へと続くドアを開いた。

魔術

身支度を調べ、勢い勇んで部屋を出たアヤであったが、扉を開けてすぐにその氣勢はそがれてしまった。ドアの外には探しに行こうとした男が立っていた。男は彼女の姿を見るとほほえみ、今日は場所を変えて話そうと言った。出鼻をくじかれた形のアヤは、うなずいて、先導する男の後について行くしかなかった。

薄暗い廊下を通り、螺旋階段を下ると、回廊に取り囲まれた城の中庭へと案内された。城は中心が抜けた円筒状をしており、この庭はその中心部分にあるらしい。中庭と言っても、テーブルやイス、ベンチが設置してあるだけで、他は植木の一本もない殺風景な場所だった。床にはタイルで模様が描かれていたが、タイルはわずかに元の色を残してくすんでいた。以前はこの庭園を美しく飾っていたのだろう。しかし、長い年月と上から降り注ぐ日の光がその彩りをすでにかき消していた。ふと、アヤはベンチの陰に白い物がいるのに気がついた。よく見るとそれは部屋にいた猫だった。しばらく猫を見つめていたアヤだったが、男に促されて庭の中央にあるテーブルに座った。

二人が来たのとは別の方向から、黒い影がワゴンを押して現れた。それはアヤが朝方に見た、黒服と同じものだった。やはり、顔がない。ただ、着ているのは朝とは異なり白いローブだった。アヤは息を飲んでそれを見つめていた。それは二人の座るテーブルの横で止まり、給仕を始めた。間近で観察し、アヤはそれが人形であることに気づいた。ローブから見える顔はよく見れば木で出来ていた。人形はアヤの視線を気にかける様子もなく、ポットから紅茶を注ぎ、ティーセットと茶菓子の載った皿をテーブルに置いた。カップや皿を持つ手と指もやはり木製だった。不思議なのはその指や体が滑らかに動いていることだった。球体関節人形など、関節が自由に動く

人形があることはアヤも知っていた。しかし、目の前のそれには球体関節もなければ、部品を組み合わせて動かせるようにした形跡もない。裾から見えている手首から先にはつなぎ目すら見えなかった。ローブの下はどうなっているんだろう？好奇心を露わにジロジロと観察を続けるアヤに構わず、人形は給仕を終えたとワゴンを押してあつという間に立ち去ってしまった。

遠ざかっていく人形の背中を見つめながら、あれはどういう仕組みなのだろうかとあれこれ思いを巡らせていたアヤだったが、目の前の男から視線を感じて、思考を中断させた。いけない。今日の目的は、この男から自分が置かれている状況を聞き出すことだった、とアヤは改めて男に向き直った。男は昨日とほぼ変わらない服装で、相変わらず青白い顔色をしていた。

「体の調子はどうだい？」

男はほほえみながらアヤに尋ね、ティーカップを手にとった。テーブルには紅茶の他に茶菓子が置かれていた。入れられたばかりの紅茶は花のような甘い香りを、焼きたてとおぼしきクッキーとスコーンは香ばしい匂いを漂わせていた。

「……おかげさまで、調子は良いです」

アヤがそう告げると、男は改めてアヤの顔を眺め、うんうんとうなずいた。

男の目を見て、アヤは一つのこと気づいた。男はアヤを観察していた。男がアヤに向ける視線は、たった今、アヤが人形に向けていたのと同じものだった。口元には微笑を浮かべてはいるものの、その目は彼女の行動を観察し、分析しようとするものだった。思い返せば、前日部屋を訪問された時もそうだった。この男は、私をモノとして見ている。その考えはアヤを不快にさせたが、男から感じていた不安や不気味さの正体をつかめたような気がして、彼女は少しだけ気分を落ち着かせた。アヤは覚悟を決め、男を見据えて口を開いた。

「今日は、この状況についてご説明いただけるのでしょうか？」

男はニヤリと笑い、アヤに尋ねた。

「何が聞きたいのかな？何でも聞いて良いよ」

男はもったいぶった態度で皿のクッキーを手にとって口に含んだ。
「まず、ここはどこですか？」

「ここはメレ大陸、レベット公国の東端、コーラ市のそのまた東端にあるエヴァレット平原。君の部屋から草原が見えただろ？あの草原を眺め下ろす丘の上に立っているからエヴァレット城と呼ばれている」

当然だが全く知らない地名。アヤは自分の推測が、できれば当たっていないことを祈りながら尋ねた。

「そういうことではなく……ここは、私の知っている世界ではないような気がするのですが」

「うん、そうだね。ここは君のいた世界からは時間も空間も隔てたところにある、全く異なる世界だよ」

半ば分かっていたこととはいえ、アヤは男の言葉にショックを受けた。

「異世界、ですか」アヤは呆然と呟いた。

「そうだよ」紅茶をすすりながら、男は平然と答えた。

「どうやって、私を連れてきたんですか？」

「空間転移の魔術」

「魔術」思いがけぬ単語にくじけそうになったアヤだったが、氣を取り直して質問を続ける。

「魔法が使えるのですか？」

「この世界には君の世界には存在しないエネルギーがあつてね、我々はそれを魔力と呼んでいる。これを制御し、利用する術を魔術と言っているんだ」

「それは、呪文を唱えたら手のひらから炎が出たりするようなものですか？」

「手から炎？燃える物がないのに炎が発生するなんておかしいだろう」

男は二つ目のクッキーをかじりながら答えた。その顔は少しだけ呆れていた。

「魔力を使ってできることは大きく分けて二つ。物質への干渉と空間の制御だ。そうだ、ちょっと実演してみよう」

男は懐から鉛筆を取り出し、アヤに手渡した。

「これは君の世界にもあっただろう。ごく普通の鉛筆だ」

木で出来たシンプルな鉛筆だった。長さは10cmほどで、先端にはナイフで削ったような跡があった。

「これに、魔術を使ってみよう」

アヤが鉛筆を返すと、男はなにやら呟きながら手のひらの鉛筆に触れた。見た目には何の変化も起こらない。しばらくなにやら呟いていたが、やがて男は再びアヤに鉛筆を手渡した。

受け取った瞬間に、アヤは鉛筆に変化が起きていることに気づいた。先ほどまで堅かった木製の柄は、グニャグニャと柔らかいゴムのようになっていた。

「これ！どうやったんですか？」

「魔力をつかって、柄の部分の性質を変えた」

目の前で起こったことに興奮しているアヤに、男はやや得意げに答えた。

「本来なら木材は堅いが、魔力を使って適切にコントロールすれば、このように柔らかくすることが出来る。魔力をコントロールする技術が魔術だ」

柄は木材とは思えないほど柔らかく、弾力性があった。しばらく、持ち上げたり握ったりして鉛筆を観察していたアヤは、あることに気がついた。

「あれ、でも、芯は硬いまま……」

男は楽しそうに答えた。

「よく気がついたね。ちょっと、力を入れて折り曲げてみて」

言われたとおり、鉛筆を折り曲げようとした。柄がこれだけ柔らかいのだ。中に入った黒鉛の芯は柔らかいのだから鉛筆は簡単に折

れるはずだった。しかし、アヤがいくら力をこめても、鉛筆は曲がらなかった。

「どういことですか？」

「芯の部分は柄とは逆に硬化させた」

「そんな器用なことが出来るんですか！」

「僕は一流の魔術師だからね」

男はニヤリと笑った。

「だから一度死んだ君の体を、生き人形に変えることも出来たんだ」
なるほどと思いつつも、アヤは疑問を感じた。

「待って！物体の性質を変えることと、それを動かすことはまた別の問題でしょ。死んだ物を生き返らせるのは木材を柔らかくさせるのとは違うでしょう」

「生きている状態と死んでいる状態、何が違うと思う？」

思わぬ質問に戸惑ったが、アヤは何とか答えを返した。

「ええと……生命活動の有無？循環系や呼吸器系が動いていて、生体の代謝や恒常性を維持するためのシステムが正常に動いていることが生きていることと言えるのでは？」

アヤの返答に男は軽く目を見開き、面白げにほほえんだ。

「そうだ。システムの維持、これが重要だ。傷ついた体を修復し、より適切な状態へと修復するのは、先ほど見せた術とそれほど変わらない。肉体を構成する要素を適切な形に変化させ、元通りに配置し直せばいい」

「でも、私は息もしていないし、血も流れていないでしょう。ちっとも元通りじゃないじゃない！」

アヤはつい叫んでしまったが、男は気にするそぶりも見せず、話を続けた。

「問題はシステムをどうするか、だ。一度死んだ物は生き返らない。どういう訳か、一度死んでしまった物はどんなにきれいに修復しても生き返ることはないんだ。姿形をどれだけ元通りに直しても、システムが元に戻らないんだよ」

男は紅茶を一口飲み、続けた。

「……だが、システムを無理矢理維持させれば話は別だ」

「無理矢理？」

「そう、魔力を使って、無理矢理システムを動かすんだ。……さっきの鉛筆を返して」

鉛筆を手にすると、男はまたなにやら呟き始めた。男が鉛筆を机に置くと、鉛筆は尖った側を下にして独りで立ち上がった。そして、ゆっくりと回転し始めた。アヤはその光景を呆然と見つめた。

「これと同じことを君の体に施した。今、君の体は魔力によって無理矢理維持されているような状態だ。勘違いしているようだが、血液は以前と同じように体中を循環している。ただし、その循環は術によってコントロールされている。また、血液が運んでいるのは栄養や酸素ではなく、魔力だ。体中に魔力を行き渡らせることで、何とか生命活動を維持している状態だ」

「……そんなことができるなら、なぜこの世界の人はそれを使わないの？」

「一つは技術的な問題だ。これだけのことが出来る魔術師は世界にもそうはいない。メンテナンスの手間だってかかる。それに、この術には大量の魔力を消費する。それだけの魔力を貯めて、使用することはそうそう出来ることじゃない。君にはまだ分からないかもしれないが、君は存在するだけで大量の魔力を消費しているんだ。そのコストたるや、相当なものだ」

「そんな術を、なぜ私で試したの？」

「いろいろ理由はあるが、一つにはこの世界でこういう術を人間で試すことは禁止されていることがある。別の世界から連れてきた君はこの世界の人間じゃないから、僕は禁を犯したことになる」

「それだけ!？」アヤは思わず怒鳴った。

「一度やってみたかった、というのもある」

男は軽く答えた。

「まあ、この辺について君はあんまり気にしないで良いよ。君は死

にかけていて、何を捨てても生き延びたいと願っていた。だから、僕は君を助けた。それだけだよ」

「……」

どうにも納得できなかったが、アヤはそれをどう表現したらいいか分からなかった。

俯いて考え込んでいるアヤを横目で見ながら、男はスコーンを食べ始めた。

魂

「……お茶でも飲んだら？ もう冷めちゃったと思うけど」

黙りこんで何やら考え込んでゐる風情のアヤに、男は声をかけた。アヤは顔を上げて、男を見つめた。いろいろと言いたいことも聞きたいこともあるが、何をどう言ったら良いのか分らない。男の言うとおりに、お茶でも飲んで少し頭を冷やそう、そう思つてアヤはティーカップに手を伸ばした。紅茶はすっかり冷めていたが、ほのかに香りは残つていた。

「うぐえっ！？！？！？！？」

カップの中の茶色い液体を口にした途端、アヤは奇声を発して含んだものを吐き出した。

「苦つつつつ！まずつつつつ！」

香りや見た目は完全に紅茶だった。しかし、味の方はアヤの知るそれとはまったく違う物だった。とにかく苦く、えぐみが強い。口当たりは最悪で、何かピリピリとした刺激まで感じる。吐き出してなお残る後味の悪さに、アヤは顔をしかめた。花のような爽やかな香りだけが唯一の救いだった。

「大げさだね、そんなにまずかった？」

「よくこんなもの飲めますね！ 苦いし、まずいし、しかも何かピリピリするし……」

「このピリピリがいいんだけどね……まあ、飲んでればそのうち慣れるよ。嗜好品なんてそんなものだろう？」

「いや、無理……」

アヤは口直しにとクツキーを手を取った。しかし、一口かじるとすぐに後悔した。クツキーなのに辛い、渋い。口を押さえて青くなっているアヤを、男は面白そうに眺めていた。

「この世界の食べ物はどれもあんな風にマズいんですか？」

「そんなにまずい？」

ニヤニヤ笑いながら、男は空になった自分のカップにおかわりを注いだ。

「君もいる？」

「いません！」

アヤは即座に答えた。

しばらくすると、白いローブの人形が再び中庭に現れ、新しいお茶とサンドイッチを運んできた。人形は水差しと木製のコップも持ってきてくれていた。アヤは恐る恐る水を口にしたが、さすがに何の味もしなかった。紅茶とクッキーの余韻が口の中からようやく消えて、アヤは心の中でため息をついた。

「……あれも生き人形ですか？」

二杯目の水を飲みながら、アヤは男に尋ねた。あののっぺらぼうと同じというのは、さすがに辛い。

「違う、あれは自動人形。与えた命令をこなすだけで、自意識なんて持っていない。もちろん魂もね」

「魂？……私にはあるんですか」

「当然だ。死体を修復しシステムを維持させただけでは生き返らない。魂がなければ体に意識や精神は宿らない」

「あの、魂って何なのでしょう。よく分からないのですが」

男はサンドイッチをつまんでいた。レタスのような野菜とハムのような物が挟まったシンプルなもので、見た目はやはり美味しそうに見えたが、アヤは手をつけようとは思わなかった。

「一般には、魂は命そのものであり、精神と肉体をつなぐもの、とよく言われるね。構成した術式に魔力を流す媒体でもある。ただ、定義するのは難しい。いくつかの説はあるけど、実際の所はよく分かっていないことが多い」

「魂が命そのものということは、死んだら魂はなくなるのでは？」

「なくなるよ。ただ、魂がいつ肉体から離れるかは一律じゃない。状況にもよるけど、死んでからしばらくの間、肉体と魂が離れない

ことはそれほど珍しい事じゃない。魂が肉体から離れないうちに肉体の方が修復されて生存に適した状態になれば、魂は再び元の肉体に宿る」

「私の場合も死んですぐだったから、魂がまだすぐそばにあった。だから、肉体が修復された時点で魂が戻ったということですか」

「そうだ」

魔術に魔力、魂……おとぎ話に出てくる単語ばかりで、アヤは内心頭を抱えた。ただ、男の話す技術や方法論は彼女の好奇心を確実に刺激していた。アヤは質問を続けた。

「そういえば、ここでは魂は観測できるんですか？」

「魔力を使うことで存在を観測することができ。なぜなのかは分からないが、魂と魔力は性質が似ていて、相互に干渉し合うんだ。だから、魔術の行使に魂の存在は必須となる。魔術師は自身の魂を媒介に魔力をコントロールしているからね」

「……もしかして私も魔術を使える？」

「可能性はある。まだ詳しく分析はしていないが、おそらくは君の魂も似たような性質をしているだろう。僕の術で君の魂を扱うことが出来たしね。それに、僕の魂ともうまいこと融合したみたいだし」

「は？」

またしても思いがけない発言に、アヤの思考は一瞬止まった。

「君自身の魂の補強と、体に施した魔術の管理のため、僕の魂の1分の1を君の魂と融合させた」

「……どういことですか？」

アヤの体に、冷たい物が走った。

「こちらの世界に来る際に、君は魂の9分の2を失った。残った魂で最適に体を管理させるためには、身体をカスタマイズする必要があった。だから、魂の9分の1を情報を得るために使わせてもらった。残りの3分の2に、僕の魂11分の1を足した」

「私の魂の3分の1はあなたの魂ってこと!？」

「違う。魂には体積はないんだ。11とか9というのはそれぞれの

魂に固有の最小分割数だ。つまり、君の現在の魂の7分の1が僕の魂由来といえる」

あまりのことに、アヤはめまいを感じた。体だけじゃなく、魂までいじられたの？ずっと感じていた感情の違和感の原因を知り、あまりのことに吐き気すら覚えた。

「……気持ち悪い」

アヤが思わずこぼしてしまった本音に、男の表情が消えた。アヤは自分の言葉の意味に、言っではいけないことを言ってしまったことに気づいた。無言で何も言わない男に、アヤは慌てて立ち上がり、頭を下げた。

「あの、失礼なことを言ってすみません！助けていただいたことには大変感謝しています。私は助かって良かったって思ってます。本当です、信じて下さい！体だって、目も見えるようになって嬉しいし、前より健康になったの、分かってるんです。だから、本当にすみません」

男は無表情のまま、頭を下げて弁明を続けるアヤを見つめていた。「……別に構わないよ。そりゃあ、知らない間に自分の体や魂を怪しい男にいじられていたら気持ち悪いさ」

「そんなこと！」

「君の中にある僕の魂は、今でも僕とつながっている。君が感じることや考えていることは、僕にも伝わるんだ」

アヤは絶句して、何も言えなかった。

「ただ、悪いけど、君から僕の魂を取り出すことはできない。魔術の管理をできなくなる恐れがあるし、すでに二つの魂の融合は進んでいるから、僕の魂だけを切り取ることもできない」

青くなって押し黙っているアヤに、男は冷たく言い放った。

「はつきり言う。君は僕の実験の被検体だ。君は禁術を試すための最高の被検体だった。だから助けた」

「そんな」

「一つ教えてあげよう。実はね、君をこちらに連れてきた魔術も禁

術の一つさ。遠く離れた異世界から、時空を超えて移動させることができるのは、自分の属する世界と因果の薄い物体だけだ。??因果というのはその世界とのつながりのことだ。家族、友人、恋人、仕事に同僚、大切にしているモノ……」

アヤの手が強く握られた。

「実際のところ、君には元の世界、元の生活に対する未練なんてないだろう？君はこちらに来て、一度も帰りたいとは思わなかったはずだ」

アヤの体がピクリと反応する。??やめて、聞きたくない。

「聞きたくない、か。それはそうだろうね。君は家族を失い、身体にも精神にも問題を抱え、最悪の形で仕事を失った。そして、唯一の心のよりどころだった恋人すら奪われた。君は自分の属する世界に心底ウンザリしていて、世界に対して愛想を尽かしていた。だから、死体とはいえこちらに來られたんだ」

「……」

「別に、君が僕をどう思おうとどうだって良いんだ。僕だって、君の過去に正直興味などない。ただ、君にはこれからもここに留まってももらわないとならない」

「……なぜ」

「まだ、禁術に関するデータが完全に取りれていないし、他に試したことともまだたくさんあるんだ」

アヤは思わず後ずさった。足にイスが引っかかり、尻餅をついた。無様なアヤを見下ろし、男はニヤニヤと笑った。

「別に、心配しなくても良い。体や魂をこれ以上いじめることはしない。一応、僕は君を人間として扱う。ここにいるなら、最低限の生活も保障する。……まあ、逃げ出しても構わないよ。また次を探すだけだから。もっとも、魔力の供給が絶たれたら、君は壊れてまた死ぬだけだね」

何と答えて良いか分からず、アヤは男を見上げていた。男はアヤの視線に一瞬バツの悪そうな顔を浮かべたが、すぐにその表情を消

した。

「今日はこのくらいにしよう。……ひどいことを言って悪かったね」
男はそう言って去っていった。アヤは呆然と、その背中を見送った。

女に背を向けた男は、ひとり自嘲の笑みを浮かべていた。

猫

男が行ってしまった後も、女はひとり中庭に残っていた。

アヤは、水の入ったコップを片手にベンチに座り、ぼんやりと空を眺めていた。中庭は静かで、時折鳥の鳴き声と自動人形の行きかう音だけが聞こえてきた。なぜか、人間は一人も見当たらなかった。そういえば、アヤはこちらに来て以来、未だ男以外の人間を一人も見かけていないことに気づいた。中庭には少なくとも2時間以上はいたが、その間に見かけたのは人形だけで、話し声すら聞こえては来なかった。これだけの城だ。仮に住んでいるのがあの男だけだとしても、維持管理のために数十人は雇われていてもおかしくない。しかし、人の気配は全くしない。その割に、どこを見ても掃除は行き届いている。中庭も殺風景なだけで、手入れ自体は手入れ自体はきちんとされている。異世界とはいえ、全く奇妙な城だ。

どうせ誰も見てないし、アヤは思い切ってベンチに寝転がった。晴れてはいるが、ぼやけた薄い青色の空を見上げ、アヤは一人ため息をつき、目を閉じた。

「私も言葉が悪かったし、怒るのは仕方ないと思うんだけど、どうしたもんかなあ……」

アヤは一人呟いた。男が吐き捨てた言葉を思い出す。確かにアヤは元の世界に帰りたいと思ってはいなかった。帰ったって、何にもないし、誰も待ってない。全て、あの男の言った通りだった。あれから、生きているのが面倒くさくて、でも死ぬのも面倒くさくて、ただ生きていただけ。アヤは心の中でつぶやいた。働きもせず、貯金と親の遺産を食いつぶすだけの日々。心配して連絡をくれたかつての同僚や数少ない友人とも自分から関係を絶った。その中には恋人といえる関係の人も含まれていた。

「……人間は、面倒くさい……」

ふと、視線を感じて目を開けると、足下に猫がいた。猫としては大型な体に、白と黒の縞々模様。ふさふさとした毛で隠れていたが、首には赤い首輪が巻かれていた。アヤは追い払おうと足を振り、にらみつけた。しかし、猫は全く意に介さない様子で、じっと座っていた。蹴る真似をしても一向に動こうとしない様子を見て、アヤは猫を追い払うのを諦めた。

「……あんだ、ここのペット？ 私あんだのご主人怒らせちゃったみたい。どうしたらいいかな？」

アヤは猫に向かって語りかけた。猫はのんびりとあくびをしていた。

「ああ言われたけど、出て行く気はないよ。助けてもらったことには本当に感謝してるんだ。だから、役に立てるなら立ちたいの」

「なら、そう伝えなさいな」

「そう言ったつもりなんだけどなあ。大体心が読めるなら、私がそう思ってるの分かるだろうに……ええ！」

「耳障りな声をあげないでくれないかしら？」

顔を洗っている猫が、確かに喋った。アヤは起き上がってまじまじと猫を見つめた。

「この世界では、動物もしゃべるの？」

「私は旦那様の使い魔です。その辺の生き物と一緒にしないで下さいな」

「使い魔！ ますますファンタジーっぽくなってきたわね」

アヤは猫の頭をなでようと手を伸ばした。猫は嫌そうに顔をしかめて、体を横に向けた。

「私の方が先輩よ、生き人形。少しは礼儀をわきまえたらいいかが」
猫は嫌味たらしく言うと、アヤの手をシッポでぴしゃりと叩いた。

アヤが謝罪し、挨拶代わりにと残っていたサンドイッチを渡すと、ぐちぐちと言いつつも猫は少し機嫌を直したようだった。猫はティ

イと名乗り、自分は主人と少年時代からの付き合いで、片腕のような存在であると語った。

「それでティイさん、どうやって謝ったらいですかね」

「まあ、しばらくお待ちなさいな。今回の一件、旦那様も落ち込んでると思うのよ」

「何で？怒らせたのは私なのに」

「旦那様はねえ、とてもお優しくて慎み深い方なの。だから、あなたのよう取るに足らないもの相手でも、相手を傷つけてしまうことをとてもお嫌いになるの。特にね、感情的になってしまった後はいつも後悔してらっしゃる」

「そんなに繊細には見えなかったけど」

猫はキツと睨んで、シッポでアヤの手を再び打った。

「痛いなあ」

「あなたのような下賤な人形に、旦那様の何が分かって言うのですか。大体、あなたがお尋ねになるから話して差し上げているのよ」

「そうでした。すみません」

アヤは素直に頭を下げた。

「それで、いつ謝りに行けばいいですかね」

「そうねえ……今はタイミングが悪いのよねえ。明後日は査察官がいらっしゃる日ですから、明日は朝からお忙しいはず。査察官がお帰りになった後なら良いのではないかしら」

「査察官？」

「魔力の大量使用の件でしょう。あの方たちはうるさいのよ。しかも、隙あらば旦那様の研究成果を盗もうとする泥棒なの。旦那様に直接手は出せない腰抜けのくせに、態度だけは偉そうだから、余計また腹が立つのよ」

ティイは怒りを感じているのだろう。毛並みを逆立たせ、ものすごい顔をしていた。

「魔力の大量使用って、もしかして私のせい？」

「そうよ。あんたみたいな小娘を生き返らせるために、旦那様はと

んでもない危険を冒したのよ。感謝なさい！」

「はい……」

アヤは小さくなって、答えた。

ティイと話している内に、空はすっかり赤く染まっていた。中庭には、テーブルを片付けに白ローブの人形がやって来ていた。そろそろ部屋に戻ろうかと立ち上がったアヤに、ティイが声をかけた。

「そうそう、明後日、査察官がいらっしゃる時は、あなたは部屋に隠れて絶対に出ちゃダメよ」

「なぜ？」

「……色々面倒なのよ。禁術のこともあるしね」

「そう、分かったわ。ところで、一つお願いがあるんですが」

「何かしら」

「私の部屋、どこだったかしら……」

猫は冷たい目で、アヤを見据えた。

獣

中庭での一件から二日。

ティイの話では、今日、査察官とやらがこの城に来るらしい。部屋に隠れておとなしくしているとの指示だったので、アヤはありがたく惰眠をむさぼっていた。

もつとも、この城の中で彼女に出来ることはほとんど皆無と言って良かった。この前日も、アヤは何か手伝えることはないかとティイに尋ねた。しかし、屋敷の間取りすら分かっていないあなたに何が出来るのかしら、と冷たくあしらわれてしまった。あぐく、私はあなたと違って忙しいから、私の仕事を邪魔しないで頂戴とまで言われてしまった。ただ、ここは異世界。生活様式はアヤのそれまでいた現代日本とは何もかもが異なる。役立たずという猫の指摘ももつともなことであつた。仕方なく、アヤは部屋の片付けをして一日を過ごした。邪魔にならないようにと隅に寄せておいた服や日用品を部屋のタンスにしまい、使いやすいように配置させると、殺風景だった部屋にも多少の生活感が漂った。

しかし、部屋の掃除はアヤに驚くほどの疲労感をもたらした。片付けと言っても、服や小物を整理し、家具を少し移動させただけの軽作業である。片付けの所要時間はおよそ2時間。起床したのも割とゆっくりだったため、活動していた時間はおよそ5時間程度。夕方にもならぬうちから眠りにつき、気がつけば朝を迎えていた。お茶会の日も、夕方部屋に戻ってベッドに横たわっていたら、いつの間にか眠ってしまった。こちらに来て、初めて目覚めた日のような気分の悪さや気だるさは感じなかったが、未だアヤの体は本調子ではないのだ。

窓から、何やらコツコツと音がした。起き上がり窓に近寄ると、

ティイがいた。窓を開けて中に入れてやると、猫は部屋の中を見渡して呟いた。

「大分マシになったわねえ」

「おかげさまで」

猫はピョンと跳ねて、タンスの上に座った。

「今日は査察官がいらっしゃるの。いいこと？絶対には部屋から出ちゃダメよ。内側から鍵もかけて。私が行ったら、窓もちゃんと閉めなさいね」

「分かってるわ。……で、いつ来るの？」

アヤは猫とベッドに座り、猫と向かい合った。

「もうじきいらっしゃると思うわ。まあ、すぐにお帰りになるとは思うのだけど」

「終わったら教えてくれる？さすがに窓も開けられないんじゃないかな暗すぎるわ」

「暗くても見えるでしょ。人形のくせに贅沢よ」

一昨日のお茶会の後、薄暗い廊下をティイに先導されて部屋まで帰った際のことだ。窓もないけど意外と明るいね、と呟いたアヤに、それは目が暗い中でも見えるようになったからだ、猫が教えてくれた。

「そりゃそうだけど。でも、昼間なのにずっと暗いところにいると、何だかおかしくなりそうで」

「そんな長くはかからないと思うわ。お帰りになったらまた来るから、とにかく大人しくしていてね」

「了解です」

ティイは体を起こすと、窓から出て行った。

猫が行ってしまったてしばらくして、アヤは窓を閉めようと窓辺によった。ふと、草原に大きな影がいるのが見えた。よく見ると、それは犬のような姿をした大きな獣だった。それはアヤが見たことのあるどんな大型犬よりも、一回り以上は大きく見えた。体型は筋骨

たくましくずんぐりとしていたが、犬はその重そうな姿とは対照的に、何かを追いかけるように颯爽と草原を駆け回っていた。アヤは誰か他にもいるかもしれないと考え、とっさに窓から身を隠してしばらく様子をうかがった。しかし、人間がいる様子はなかったので、アヤは手早く鎧戸と窓を閉めた。鎧戸を閉める一瞬、獣がこちらを見ているような気がしたが、窓を閉めてベッドに戻ったアヤは、そのことをすぐに忘れた。

獣は確かに彼女を見つめていた。

事件

薄闇のなかでまどろんでいたアヤだったが、そのまどろみは突如として破られた。

静寂に包まれていた屋敷に、バチャリという不気味な音が響いた。大きな水風船がはじけ飛んだような音と同時に、何やら悲鳴のような声がかすかに聞こえた。壁や床が振動で小刻みに揺れ、窓がカタカタと音を立てた。

爆発？それとも地震？小さいながら、揺れはまだ収まっていなかった。ベッドから立ち上がったアヤは廊下へとつながるドアに走り寄った。ドアを開けようとしたところで、外に出るなと言う猫の忠告が頭をよぎった。ティイは絶対に部屋を出るなと言った。この揺れは、査察とやらにに關連している可能性もある。どうしようか迷っている間に、揺れは徐々に収まってきた。ホッとして、アヤはドアにもたれるように座り込んだ。

ふと、廊下を這いずるような静かな音が聞こえた。その気配はアヤの部屋の前で止まった。音からして人ではない。アヤは緊張して、息を潜めた。

「大丈夫かい？」

ドアの向こうから低い女の声がした。

「ティイ？何があったの？」

アヤがドアを開けようとする、ティイは開けるなと鋭い声で制した。

「でも」

「まだ外に出てはダメ。大丈夫だから、もうしばらくここに隠れていなさい。何があっても、絶対に出てはダメ」

「……分かった」

アヤが言うと、後で必ず来るから、と言い残して去っていった。

遠ざかっていく気配に、アヤは何となく違和感を感じた。しかし、その正体は分からなかった。

再度の異変に備え、アヤはドアの前に座り込んでいたが、その後は何も起こらなかった。ドアに耳をつけて外の様子をうかがったが、屋敷は元の静寂を取り戻していた。

破裂音、それに続く地震のような揺れ。一体何だったのだろう。彼女はドアの前にうずくまったまま考えていた。しかし、分からないことが多すぎる。状況を考察するだけの情報も知識もない。魔術を勉強できれば最高なんだけど、アヤは一人ごちる。しかし、あの男はそこまで親切なんだろうか？ 後で謝りに行く時、とりあえず頼んでみよう。彼女は思った。

さらに一時間ほど経った頃だろうか。ティイの声が聞こえ、ドアがノックされた。アヤが急いでドアを開けると、猫がするりと入ってきた。ティイは疲れたような顔をしていた。

「さっきのは何だったの？」

アヤがそう尋ねると、ティイは暗い顔をして答えた。

「査察官が、ちょっとねえ……それで旦那様が魔力を」

「あの爆発がそれ？」

「そう。応接間がひどいことになってしまったわ」

「片付け、手伝おうか？」

「自動人形がもうやっているわ。大丈夫」

ティイはのびをすると、ふうっと息をついた。

「そういえば、査察官はもう帰ったのよね？ あの人はどうしてるの？」

「それは……」

「僕に何か用？」

突然の声に顔を上げると、ドアから男が覗いていた。思いがけないことに、アヤは少し焦った。

「ええと、その、こんにちは」

「こんにちは」

部屋に入ってきた男は、薄気味悪いほどニコニコと笑っていた。男は少しやつれたように見えた。

「それで、僕に何か用があるんだよね。ティイから聞いたんだけど」
チラリと猫を見ると、なぜか申し訳なさそうな顔をしていた。アヤは思い切って言った。

「あの、この間は失礼なことを言って申し訳ありませんでした」

「そのことならもう良いよ。僕も感情的になってしまっただけが悪かったね」

アヤはホッとして、頭を下げた。

「どうもありがとうございます」

「そこまで気にしなくて良いよ。君の状況を考えれば、あの位当然だ」

「いえ、命の恩人と言える方に、失礼な態度でした。……私はここで暮らしたいと思います。構いませんか？」

男は相変わらず笑っている。不気味なほどに。

「そう。良かった。もしかしたら出て行っちゃうんじゃないかって心配してたんだ」

「そんなことはしません。お役に立てるか分かりませんが、どうぞよろしく願います」

「こちらこそ」

アヤから視線を外した男は、興味深そうに部屋を見回して言った。

「そうそう、足りない物とかあったら言ってね。用意させるから。それで、他に用はない？僕もちょっと疲れていてね、もう帰って良いかな」

「お忙しいのに、わざわざ来ていただいてすみません。……あの、一つお願いがあるのですが」

「何？」

「私に魔術を教えてくださいませんか？」

「いいよ」

思い切って聞いた言葉に、あっさりと答えが返ってきて、アヤはかえって困惑した。

「元々そのつもりだったし。あと、文字も読めるように勉強してね。話す方は魔術でどうにでもなるけど、さすがに読み書きまでは難しくてね」

今更ながら、アヤは自分と男が話している不思議を認識した。世界が違うのだから、言葉が通じる訳がない。

「……魔術って便利ですね」

男は相変わらず笑っており、アヤを面白い物を見るように眺めていた。

「しばらく仕事で忙しいから、時間が出来たら少しずつ教えてあげよう。文字については、ティイに教わると良い」

「読み書きできるの!？」

思わず猫を見つめると、当然だと言わんばかりの顔をしていた。

「じゃ、僕は戻るね。ティイ、よろしくね」

猫の返事を聞くと、男は身を翻してドアの方へ歩いて行った。ティイもその後ろについて行く。

「そうそう……一つだけ聞いても良い？」

振り返った男が言った。

「何ですか？」

「君のその冷静さは元々なの？それとも、生き人形になっちゃったせいなのかな？」

「は？」

「初めて会話した日、君はパニックもあっただろうが、かなり気が立っていた。しかし、僕の言葉をあっさり聞き入れて、自分が生き人形なんて訳の分からないものにされてしまったことをすぐに受け入れてしまった。一昨日のことだって、君はもっと怒っておかしくない。それなのに、自分がされた忌まわしいことより、むしろ僕の気を害したことを気にしていた」

男の言わんとするところが分からず、アヤは黙って男を見つめていた。

「僕は君の魂と身体を加工した。しかし、精神は触っていない。…正直いうとね、僕は目を覚ました君が発狂していてもおかしくな
いと思っていたんだ。だからティイに監視させていた」

「本当に、君は面白い被検体だよ」

男はそれだけ言い残して、猫とともに部屋を出て行った。

部屋には、呆然とした顔の女だけが残された。

病理

それから、一月が経った。

この間、男は何やら忙しいらしく、ほとんど顔を見せなかった。顔を合わせたのは三度、メンテナンスと称してアヤの体を診察した時だけだった。施された魔術を調整し、より効率良く身体を動かせるように魔力の流れを微調整するのだという。この作業は、彼女の体力を飛躍的に上昇させた。彼女は一度目のメンテナンスの後から、男の指示もあって、体を慣らし鍛えるためのラジオ体操と廊下のランニングを行っていた。当初、半周するだけでめまいを起こし、気絶しまうほど体力を消耗したが（この時は廊下に倒れているところをティイを見つけ、急遽二度目のメンテナンスが行われた）、ほんの数日で、三周ほど走ってもその後一日中勉強して平然としていられるようになった。三度目のメンテナンス後には、全力で十周走っても、まだあと十周は余裕で走れるくらいになっていた。

また、アヤはティイに読み書きの手ほどきを受けていた。この世界で使われているのは英語のような表音文字で、50個ほどの記号を組み合わせて音節を作るタイプの言語だった。もちろん記号の形はアルファベットとは全く異なっていた。文字を覚えるより難しかったのは、発音の習得だった。ティイが言葉を発すると、それはアヤの耳には自動的に日本語に変換されてしまう。しかし、この魔術の効果を止めてしまうと、二人の会話は全く成立しない。

ティイが男に相談したところ、一つ一つの文字の読み方と、音節の読み方を繰り返し復唱することから始めるという指示があった。アヤが発音を一通り覚えると、ティイが音節をゆっくり読み上げた場合に限り、言葉が本来の音で聞こえるようになった。アヤはティイが読み上げる簡単な文章を復唱しつつ、一つ一つの文字を書き写す作業をひたすら続けた。

後に男に尋ねたところ、アヤに施されたのはこちらの世界の言葉とアヤの基本言語を結びつけるような魔術だったらしい。全てのアルファベットを覚え、ある程度の発音が出来るようになると、アヤはその単語や文章が何を理解しているのか分かるようになった。無論、アヤが知らない単語は自動的に変換はされない。例えば、この世界にしかない動物の名前であるとか、魔術の専門用語などだ。向こうにもこれがあれば、英語であんなに苦勞しなくて良かったのに。かつて、第二言語の習得に大変苦勞したアヤであったが、今回はほんの数日で簡単な文章なら読み書きできるレベルに達していた。

夕方になり、ティイは部屋を去った。夕焼けが差し込んで赤くなった部屋の中では、アヤが鉛筆を走らせる音だけが響いていた。彼女の活動時間は、当初と比べて随分と長くなっていた。朝日と共に起き、日が沈んだら眠る生活。アヤは以前では考えられないほどの規則正しい生活を送っていた。夕日が陰り、部屋が薄闇に包まれ始めた頃になって、ようやく彼女は机の前から離れた。

窓を閉めてしまうと、部屋の中はすっかり暗くなってしまった。しかし、今のアヤには闇の中でもはっきりと物が見える。彼女は暗闇が嫌いだった。闇の中には何かがあるような気がして、その何かが語りかけてくるような気がして、夜も常夜灯の光がないと眠れなかったくらいだ。しかし、彼女は暗闇に以前ほどの恐怖を感じなくなっていた。体の変化ほど明瞭ではないが、体と一緒に、心の方もようやくまともになってきたのかもしれない、アヤはそう感じていた。

彼女はもう食事をしない。食べなくても空腹感はないし、体も動く。アヤは眠気を感じてベッドに潜り込んだ。それは彼女に残された、唯一動物らしい欲求だった。

闇は、アヤの意識を自身の心へと向かわせた。アヤの心は不自然

なまでに落ち着いていた。ここへ来る前、精神的に不安定だったのが嘘のようだ。ここへ来た当初こそ、パニックを起こしたり、男の言葉にショックを受けたりして、感情の振れ幅が大きくなっていたが、今ではすっかり感情の揺れがなくなっていた。なぜだろう、やはり精神も何かいじられたんだろうか、彼女は少しだけ思った。しかし、もし仮に肉体と精神の両方を弄られていたとして、それが一体何だというのだろう。かりそめの生でも、必要としてくれるならできるだけのことをしよう。アヤは心からそう思っていた。

男が指摘したように、端から見ても、アヤは奇妙なほどこの異常な状況に順応していた。これには二つの理由があった。一つは彼女がこの世界に来る要因にもなった、元の世界に対する執着の薄さ、そしてもう一つはアヤの元々の性格だった。

因果が薄い、と男は言った。元の世界で、彼女は誰も求めなかった。それはアヤが元々持っていた性格のためでもあるし、両親の死という突然の不幸と、信頼し尊敬していた相手からの裏切り行為の結果でもあった。人を求めるのを完全に止めたら、やがて誰からも求められなくなった。

ただ、昔から一人でいることを好んでいた彼女にとって、それは悪い状況ではなかった。しかし同時に、そう思うこと自体が異常なことであると、アヤは十分に理解していた。だから、かつてはそれを人に悟られないように努力していた。その結果が友人であり、恋人であり、仕事であった。

しかし、両親が死んだ時、彼女はそのための努力が出来なくなってしまった。変わり者の娘を優しく受け入れてくれた両親の死は、彼女に予想以上のダメージを与えた。これまでの自分の努力が、結局は両親を安心させるためだけのものだったことを悟り、ショックだった。彼女は打ち込んでいたはずの仕事への情熱すら失い、同僚の信頼をなくした。結果、成果だけを取り上げられ、職場を追い出された。

彼女を心配した恋人や友人は、アヤを何とか励まそうとした。しかし、彼女にはそれすら耐え難かった。突き放した恋人と友人はいつの間にか恋仲となっており、決まり悪そうに彼女の元を去っていた。

誰もいない、何もない生活は、彼女に安らぎを与えた。しかし、その毒は彼女の心身を少しずつ壊していた。アヤがそんな状態でも自殺を考えなかったのは、「自殺は決してしない」という両親との幼い頃からの約束があったからに過ぎない。

実のところ、彼女にとって男は新しい親だったのかもしれない。彼女を作り替え、命をくれた男。例えばそれがどんな目的からであれ、男はアヤを必要とし、居場所を提供してくれ、彼女が努力を続ける動機をくれた。

私の生は彼が支払ったコストと見合うのだろうか。ふと、アヤは思った。

この間警察官が来たのは、魔力の大量消費について調べるためだったという。大量の魔力は、アヤを助けるために使われた。ティイによれば、査察とは大変面倒なものらしい。そして、まだよく分からないことも多いが、魔力とはそれなりに貴重なエネルギーであるようだ。そして、彼女の体の維持管理のため、男は自分の魂まで分け与えてくれたのだという。

何かを得るには当然、それ相応の代償が必要だ。彼女は心拍や呼吸、そして食べ物の消化能力も奪われたが、そんなもの、生き延びられたことに比べたら何てことはない。何があっても生きていれば良いことがある。アヤが心の中で反芻したそれは、彼女の両親が繰り返しアヤに語った言葉だった。

見ず知らずの私に、なぜ男はここまでしてくれたのだろう。裏には何か意図があるのは確実だ。でも、それは何だろう？

アヤが受け取ったのは身に余るほどの恩寵だった。一度終わったはずの生、健康な体、……そこに宿る、健全(?)な精神。その幸

運がいかほどのモノかを想像し、アヤは身震いした。

それでも、この恩を返すためなら何だってしよう。アヤは改めて誓う。問題は、ここ数ヶ月のニート生活で、人付き合いの仕方を忘れてしまったことだろうか。気さくな猫はともかく、神経質そうな男とうまくやっていくのは大変そうな気がした。

やがて、アヤは眠りに落ちた。彼女はもう、夢も見ない。

茶会

「……やっぱりダメです。また失敗ですね」

「正直、全くできないとは思えないんだけど……まあ、これは才能もあるから、気長にやるしかないかもね」

アヤは手に持った小さな枝を見つめた。何の変哲もないただの木の枝だ。持ったのと反対の手で、枝をそっとさす。男が教えてくれた式を呟きながら、目をつぶって枝が鉄のように硬くなった状態を強くイメージした。ふっ、と息をつき、目を開け、もう一度枝を確かめた。両手で端を握って軽く力を入れると、枝はたわんであっさりと折れた。何の変哲もない、ただの木の枝だった。

「簡単な式だから、大抵の人にできると仰ってませんでした？」

「言った。ティイだってこの程度あっさりこなす。でも、君にはできないようだね」

はつきりと言う男の言葉に、さすがのアヤもうなだれた。

言葉の習得も大分進み、アヤが簡単な本なら読めるようになった頃、男の仕事も一段落ついたようだった。男は時折暇をみては、アヤに魔術を教えてくれた。しかし、いくら練習しても、彼女は初歩的な魔術すら使えなかった。君には魔術の才能がないみたいだね。と男の評価は容赦がなかった。

練習を終え、男は中庭でお茶を飲もうとアヤを誘った。ついて行く自動人形がすでにテーブルを整えていた。イスの一つには、ティイが座っていた。

二人と一匹でテーブルを囲む。男と中庭でお茶を飲むのは、あの一件以来初めてだった。

「君が魔術を使えない理由の一つは、精神の弱さだと思う」

男は用意されたパイを頬張りながら言った。向かいに座った男は相変わらず顔色が悪い。土気色の顔でニヤニヤ笑うから、いつにも

増して不気味だった。今日のお茶菓子はリンゴのような果物を使ったパイ。ティイも美味しそうに食べている。アヤの前にも一応置かれているが、彼女は食べる気にはならなかった。

「どういう意味ですか？ 魔力の方に問題がある可能性だってありますよ」

「そのままの意味だよ。魔術をコントロールするには強い意志とイメージ力が必要だ。それに、大体この場所で魔力が足りないことはあり得ない。だから、問題は君にある」

「感情が希薄なんです。だから魂が動かないんですよ」
「……」

男と猫は、本当に容赦がない。

男によれば、この城は魔力の特異点にあるという。魔力は常に空から降り注いでいるが、場所によつてはこの城のように、集まる魔力の量が多くなるらしい。アヤや自動人形を動かす魔力は非常に膨大だ。自動人形はともかく、彼女の方は普通の場所では動くこともできなくなるという。だから、アヤは城を出ることができない。もっとも、彼女にはそんな気は毛頭なかったが。

「生き人形化の弊害の可能性もあるね。身体の方が人間離れしてくせいで、精神の方までそれにつられたか」

「全く毎日バタバタを廊下を走り回って。うるさいし迷惑ですよ」

「お二人が構わないと言ったからやっているんです。今更止めろと言われましても」

アヤの身体能力は日々向上していくばかりだった。今では廊下を全力で30周が彼女の日課になっており、さらに階段の上り下りを10セット追加していた。強くなったのは脚力だけではない。腕力も明らかに強くなっていて、タンスやベッド程度なら一人で持ち上げて動かせるようになっていた。

「別に止める必要はないよ。どうせ僕ら以外、人なんていないんだから。それより、そこまで術がうまく行くとは思っていなかったよ。こちらとしては嬉しい誤算だ。全く健康でうらやましい限りだよ」

男はのんびりとお茶を飲み干した。

「体調、まだあまりよろしくないんですか？」

「ここのところ忙しかったしね。まあ、倒れない程度には休んでるんだけど。ティイがうるさいし」

「旦那様の下僕として、当然のことですわ。それをそんな風に言われるなんて！」

この少し前、男は一度倒れた。原因は極度の睡眠不足。図書室で突然気を失い、そのまま二日ほど眠り続けたという。その間、ティイは男につきっきりで、ずっと男を見守っていた。アヤも手伝おうと部屋に行ったが、ティイに追い出され、結局何もできなかった。

使い魔とは、生き物を生きた状態のまま加工して作る物らしい。こめる魂も、もちろんその生き物のオリジナルを使用する。ただ、そのままだと知能が足りず何もできなかったり、言うことを聞かなかったりするのだそうだ。だから、脳を肥大化させ知能を高める処置を施すと同時に、魂自体を改良して作成者の命令を遂行できるだけの精神が発生するようにするという。ティイは優秀な魔術師である男の使い魔であるだけあって、命令を完全にこなすだけの知性と忠誠心、さらに簡単な魔術まで使えるという。この話を聞いた時、いくら魔術に向いてないとはいえ、猫に負けるなんてと、アヤは心の中で呟いた。

「結構おせっかいですよ、ティイは」

アヤの言葉に、男もうなずいた。猫はキーツと毛並みを逆立てた。

翌日、朝からアヤの部屋を尋ねて来た。今日は空間制御の魔術を使うから、見に来いという誘いだった。アヤは喜んでその誘いを受けた。

魔術には主に物質操作と空間操作の二種類があるという。ただ、空間制御はそれなりに経験を積んだ魔術師にしか許されていないらしい。また、やはり大量の魔力を消費するために使える場所は限られており、その行使には最高の技量と経験が求められる。そのため

か、アヤをこちらに運ぶ際に使用したような、異世界との間をつなぐような魔術は禁術とされているという。

「ここだよ」

アヤは城の地下室に案内された。部屋の中は意外と明るく、本がたくさん詰まった本棚と机の他にはほとんど物がなかった。一番奥の壁には、魔術に使うのであろう何か模様が描かれていた。部屋にはティイがいて、いそいそと準備を行っていた。

「旦那様、準備は整っております」

ティイの言葉に男は頷くと、奥の壁の前に立った。

「じゃあ、始めるよ。アヤはできるだけ離れているように」

「はい」

「ティイ、サポートよろしく」

「心得ております」

男は壁に手を当て、何か呟き始めた。

市場

魔方陣のような模様が描かれている以外は何の変哲もない壁に、突如町並みが映り込んだ。それはマーケットのような場所で、沢山の人が賑わっていた。自動人形らしきものが荷物を運んでいる様子も見える。

「……他にもちゃんと人がいるんですね」

アヤが思わず呟くと、ティイが聞いた。

「どういう意味、それ」

「え、いや、城の外にはちゃんと人間社会が存在するんだと……」
部屋の壁に外部の映像が映り込む様子は、プロジェクターでスクリーンに動画を投影している様子と似ていた。ふと、アヤは職場の会議室を思い出した。

「術にはあんまり驚かないのね」

ティイがアヤに尋ねた。少し不満そうな顔をしていた。

「これ、ライブ中継なの？」

「らいぶちゅうけいって何だい？」

男が口を挟んだ。アヤとティイや男の会話は、時折言葉の意味を巡って止まる。大方の言葉はアヤに施された魔術によって自動翻訳されるが、時折片方ない語彙が会話に出ると、その意味の説明が必要であった。

「ええと、現在の状態をそのまま別の場所に映し出すこと、ですかね」

「そうじゃない場合があるの？」

「映像を予め記録して、それを映すんです。こっちの方が普通でしたね」

「君の世界には映像を映す機械があったんだっけか。こんな感じかい？」

「はい、ちょっと似てます」

アヤがその映像を見ていると、時折、画面に突然人影が現れることに気づいた。

「これ、何ですか？その場に人が突然現れているように見えるんですが」

「そうだよ。ここから向こうに行けるんだ」

男によれば、この壁は壁に映っている映像の場所にある別の陣とつながっているらしい。文字通り、スクリーンの向こう側に行けるのだという。ただし、今回陣をつないだ場所は公共の陣で、一方通行しか出来ないらしい。陣は大きな町には大抵存在し、帰りは自分の町へとつながっている陣を利用するという。

「ここからも行けるんですか？」

「行けるよ。ただ、町からここへの陣がないから帰ってこれないけどね……あ、来た」

ふと画面を見ると、中年の女が画面の前に立っていた。恰幅の良いい、商人風の女だった。女はこちらを見て軽く手を振っている。気がつくのと、部屋の中に灰色のフードを着た自動人形がいた。男は人形を呼びつけると何やら命令をして、小さなバッグを人形に持たせた。人形は壁に近づくと、そのまま壁の中に飲み込まれるようにして消えていった。人形の後ろ姿は、そのまま、画面に映し出された。

「すごい……」

その光景にアヤは思わず呟いた。

人形は女の元に歩み寄ると、先ほどのバッグを手渡した。中身を確認した女はこちらに向かって頷くと、そのまま人形を連れて画面から消えてしまった。

「お使いですか？」

「ああ、彼女はなじみの商人だ。たまにこうして食料品や生活用品を調達している」

「ご自分では行かないのですか？たまには外出も良いと思いますが」

アヤの何気ない質問に、一瞬、ティイが緊張したのが見えた。何かマズいことを言ってしまったかもしれない。アヤは微かに緊張し

て、男の返事を待った。しかし、男の反応は普通だった。

「……僕は体が良くないから、すぐ疲れてしまっただね。こういう人が多いところは苦手なんだよ」

「そうでしたか」

ティイがホッとしているのを感じて、アヤも内心安堵した。とりあえず、この件は聞くのを止めよう。アヤはそう思った。

「帰りはどうするんですか？」

アヤは話を変えようと男に尋ねた。

「そのための陣を渡してあるんだ。時間になったらつなぐことになる」

「なるほど……」

「時間はもう少し先だ。見たいかい？」

「はい」

「そうか。悪いがこれから別の仕事をする。また呼びに行くから、部屋に戻ってくれ」

「分かりました、失礼します」

アヤは素直に部屋へ戻った。

部屋に戻ったアヤは、暇つぶしに部屋の掃除を始めた。ここに来た当初は家具と日用品以外はない殺風景な部屋だったが、最近では勉強用にと借りた本や資料の類が増えてきていた。机の上に積み上げられた本を整理しながら、アヤはふと先ほどの会話を思い出した。

男やティイが、まだアヤに教えてくれないことがいくつかあった。一つは城に他に人がいない理由だ。以前アヤが尋ねた際には、この土地には魔力が多すぎて、人が住むのにはあまり適していないということしか教えてくれなかった。確かに、窓から眺める周辺の土地はやせ衰えて耕作には向かなそうに見えた。しかし、大量の魔力は貴重なはずで、魔術師ならばここに研究拠点を構えたいと思うのではないか。それなのに、この城には男とアヤと猫、そして数体の人

形しかない。部屋は何部屋も空いているのに、そのほとんどには使われた形跡すらない。

そして、一番の謎は男のことだった。実は、アヤはまだ男の名前を知らない。尋ねても、もう知っているはずだから思い出してねとニヤニヤと笑うだけだった。覚えがないと言っても、そのうちに思い出してくれれば良いからと返されてしまう。ならばとアヤはティイに尋ねたが、すでに口止めされた後だった。男の素性はもって分らない。禁術という、どう考えても一般向けではなさそうなものの資料を大量所持している理由も、生活費や研究費をどう得ているかすら謎だ。また、多すぎる魔力が体に良くないのであれば、男やティイにも何かしら影響があるはずだ。特に男は、体が弱いと常日頃言っている。この魔力が男の体に悪影響を与えているのではないかとアヤは密かに疑っているが、僕は大丈夫という返事だけで、まともに答えてはもらえなかった。

折に触れて尋ねてはいるが、男もティイもこれらの質問には回答する気がないらしい。いつも適当に濁されるのが常だった。下手に聞き出そうとすれば、先ほどのように男の機嫌を損ねてしまう恐れもあった。いつか、私を信賴してくれれば話してくれるのだろうか。アヤは密かに期待していた。

本を並べ、筆記用具を整理すると、机の上は見違えるほどきれいになった。アヤは仕上がりに満足して、窓際のイスに座った。

窓からは草原が見えた。明るい日差しに照らされて、丈の短い草がそよそよと風に揺れている。ただ、冷静になって考えてみると、それはいくらか奇妙な光景だった。まず、生き物の影が見えない。時折鳥が飛んでいるのは見かけるが、アヤは野生動物の類を見かけたことがない。一度、奇妙な獣を見ただけだった。草が生えているのにそれを食べるものはいない。また、旅人や通行人の類が通ることもない。

アヤがこちらに来てから、男以外の人間を見たのは先ほどの魔術

による映像が初めてだった。男はアヤの存在を隠したいようだった。以前、査察官とやらが来た時は、アヤが部屋の外に出ないように男もティイも神経を尖らせていた。単に秘術を行ったことがバレるのがマズいのか、それとも別に理由があるのか。例えば、男の評判の問題だ。猫と暮らす孤独な魔術師が、女を生き人形にして側に置いている……。このシチュエーションは確かに怪しい。別にそういう関係でなくても、人々は勝手なことを言うだろう。アヤは窓からの景色を見ながら、そんなことをぼんやりと考えていた。窓から入る乾いた風が気持ちよかった。

気がつくと、彼女は座ったままウトウトと眠っていた。そこに猫がやって来て、真っ昼間から何を油を売っている！とアヤを叩き起こした。いつの間にか時間が来ていたのだ。ブツブツ言う猫を宥め、窓を閉めようと立ち上がったアヤは、ふと草原に何かがいるのを見つけた。

いつか見た、あの獣だった。じっと座って、こちらを見つめていた。

いつから見られていた？アヤはその視線に少し悪寒を感じて、ティイに言おうかと迷った。しかし、なかなか部屋から出ようとしないう彼女に痺れを切らしたティイが叫んだので、アヤはそのまま窓を閉め、急いで部屋を出た。

もう時間なんだから余計な手間をかけさせないでと、ティイは走りながらもまだブツブツと言っていた。アヤはその後ろ姿を追いながらも、悪い予感がするのを振り払えずにいた。

荷物

「これは図書室。こっちはそこに積んでおいて」

「はい」

アヤは重い木箱をせっせと運んでいた。アヤとティイが地下室に行くと、先ほどは町を映していた壁に、どこかの家の部屋が映し出されていた。部屋には山のような物資が積まれており、聞けばそれは今回買い付けた品だという。灰色ローブの自動人形が壁を行ったり来たりして、地下室に荷物を移動させていた。地下室には他の白いローブの人形と黒いローブの人形も来ていて、食料と思しき大きな布袋を台車に乗せて運んでいた。男とティイはといえば、イスに座ってアヤと人形たちに指示を出すだけだった。

「ご苦労。手伝ってくれて助かったよ」

本が大量に詰まった木箱を運び終え、地下室に戻ってきたアヤに、男が声をかけた。いくら体力が人並み外れてきたとはいえ、五十キロはあるのかという木箱を持ち、階段を上り、図書室へと運ぶ作業を三往復もさせられては、さすがのアヤもくたくただった。

「体力馬鹿もたまには役に立ちますわね」

ティイの嫌味が聞こえたが、座り込んだアヤには反論する気力もなかった。

「リストのチェックは？」

「問題ありません。全て揃っていますわ」

「それにしても、ちょっと買い過ぎちゃったかな」

「三ヶ月は持ちますわね」

男とティイが会話をしていたので、アヤは何も言わず部屋に戻ろうと立ち上がった。それを男が目留めた。

「あ、その箱、君のだから持って行って良いよ」

男は部屋の片隅に置かれた一つの箱を指さした。

「私のですか？」

アヤが訝しげに聞き返すと、男はニヤリと笑って言う。

「服と下着だ」

箱を持って自室に戻ると、アヤは早速箱を開けた。中身は確かに女物らしい鮮やかな色使いの服だった。これまでアヤは男とほぼ同じ、シャツとズボンに上着という少々だらしない格好をしていた。それは色味のない質素なものだった。取り出して当ててみると、胸元が大きく開いていたり、体のラインがピタリと出るようなデザインだったり、あまりアヤの好みではなかった。服くらい自分で買に行ければ良いんだけど、とアヤは思う。しかし、男なりに気を遣ってくれたのだろうと思い、少し嬉しくもあった。

その夜のことだった。アヤはふと、城の中でかすかな足音がするのに気がついて目を覚ました。その音はとても小さく、常人では聞き取れなかっただろう。その足音は明らかに男の物でも人形たちの物でもなく、当然ティイのものでもなかった。アヤは不審に思い、ドア越しにそっと様子をうかがった。

足音の主は少なくとも二人いた。同じフロアの廊下に一人、下の回廊にも恐らく一人。さすがに細かい場所までは分からなかったが、あちこち歩き回って、何かを探しているような感じがした。

泥棒だろうか？アヤは音がしないように用心しながらドアに鍵をかけた。武器になるようなものもなかったので、近くにあったほうきを手に取って、万が一に備えた。

男やティイは気づいていないのだろうか？男はともかく、猫であるティイは気づいている可能性がある。アヤはどうか二人にこの状況を伝えたかったが、方法を思いつかなかった。そういえばと、ふとアヤは男が自分の心を読めると以前言っていたのを思い出した。ただ、この件に関しては男のはったりか、あるいは読めると言っ

も感情の流れが読めるだけなのではないかとアヤは踏んでいた。そのくらい、男はアヤの感情に鈍感だった。

ダメ元でアヤは精神を集中させ、心の中で男に呼びかけてみた。誰かが城の中にいる、と。せめて私の危機感だけでも伝われば良いんだけど、とアヤは思った。

その時、アヤは足音の一つが自分の部屋に近づいているのに気づいた。とっさに洗面台のある小部屋の影に身を隠し、音を立てないように動きを止めた。ほうきを握る手に自然と力がこもる。足音が過ぎ去ってくれるのを祈りながら、近づいてくる足音に耳を澄ませた。

足音は、アヤの部屋の前で止まった。ドアノブを回すが、鍵がかかっているので開かない。ほうきを握りしめるアヤの額に、汗が流れ落ちた。微かにカチャカチャという、金属のふれ合う音が聞こえた。

鍵の開く小さな音が、部屋中に響いた。

侵入者

ドアが開けられ、部屋の中に人影が滑り込んできた。少しだけ開けた小部屋のドアから、アヤは様子を窺った。人影の持つ小さなラントンが部屋を薄く照らしている。人影は大柄な男のように見える。影は乱れたベッドに近づいた。

賊がアヤに気がつくまで、そう時間はかからないだろう。アヤのいる小部屋には隠れる場所などない。賊が小部屋に入ってきたら終わりだ。そっと部屋の方を伺いながら、アヤはこれからどうすべきかを必死に考えていた。

手にあるのはほうきが一つ。武器になるようなものなどない。体力だけならあっても武術の経験など皆無のアヤに、戦うという選択肢は最初からなかった。いかに逃げるかが問題だった。小部屋に閉じこもって籠城するか、あるいは賊が気がつく前に廊下に出て、逃げながら助けを呼ぶか。

逡巡しているうちに、影が振り返ってアヤのいる方を照らした。

そして、それは彼女に気づいた。

マズい！とアヤはドアを閉め、渾身の力でドアを押さえた。男はドアに駆け寄り、無理矢理開けようとした。

「開けろ！大人しくすれば命までは取らない！開けろ！」

賊の怒鳴り声が聞こえた。ドアがもの凄い力で引かれる。アヤは内心震え上がったが、体中の力を振り絞って何とかドアを押さえた。

「誰か！誰か助けて！」

ドアを押さえながらアヤは叫んだ。

「！見つけたぞ！女の方を見つけた！おい！」

賊は仲間を呼んだようだった。部屋の外から足音が聞こえた。こちらに向かっている。アヤは泣きながらドアノブを必死に押さえた。

「アヤ！大丈夫！？」

ふいにティイの声が聞こえ、ギャツという悲鳴が聞こえた。ドア

を開けようとする力が消えた。

「何しやがる！この！」

ドアを開けると、自動人形が男にのし掛かって押さえつけているのが見えた。

「アヤ、逃げるわよ！」

ティイの声にはっとして、アヤは小部屋を飛び出して、猫と共に走り出した。

「怪我はない？」

「大丈夫。それよりあれは？これからどうするの？」

「まずは地下室へ。旦那様もそこにいるわ」

ふと後ろを向くと、アヤの部屋から賊が出てくるのが見えた。男は大声を上げて、二人を追ってきた。

階段を駆け下り、回廊を抜け、中庭に差し掛かったところでもう一人の賊に出くわした。賊は一瞬驚いた顔をしたが、ナイフを構え、道をふさごうとした。

「このまま行くわよ！」

立ち止まろうとしたアヤを制して叫ぶと、ティイは賊の顔めがけて飛びかかった。鋭い爪で顔を挟まれ、男はナイフをメチャクチャに振って猫を追ひ払おうとする。猫は男をあざ笑うかのように飛び跳ねて、もう一度顔を狙って攻撃した。賊はナイフを落とし、顔を押さえ悲鳴を上げた。

地面に戻ったティイは一瞬アヤを見た。アヤは軽く頷いて、勢いつけて男にぶつかった。男は廊下に倒れ込んで、のたうち回った。アヤはナイフを拾って、地下室へとつながる階段へとひたすら走った。

地下室への階段を走り、地下室まであと少しという場所まで来た。その時、不意にティイが止まった。よく見ると、前方に獣がいるのが見えた。昼間、窓からアヤを見つめていた獣だった。

「……使い魔ね」

賊の仲間だったのか！アヤは驚き、男やティイに獣について伝えなかったことを後悔した。背後からは先ほどの連中が追ってきているのが分かった。小さな声で猫が言った。

「私が何とかするから、先に部屋へ。入ったらドアを閉めて」
「でも」

「私なら大丈夫ですから。旦那様の元へ、早く。」

その時、獣の背後から人形が飛びついた。

「こっちだ！早く来い！」

突然、男の声が聞こえた。獣は奇襲にひるんでいた。ティイはその隙を見逃さず、獣に飛びかかった。人形とティイと獣はもみ合って、転がった。獣の巨体が近くにあった部屋の木製のドアを破り、その中へと転がり込んだ。

「アヤ！こっちだ、早く来い！」

男が叫ぶ。

「旦那様を頼みますよ！」

一瞬ためらったアヤだったが、背後から迫る足音とティイの言葉に再び走り出した。

部屋の横を通る時、アヤは獣がティイの喉笛を引き裂くのを見た。ティイはアヤを見つめていた。

アヤは叫び声を上げて、逃げることにできなかった。

賊

男とアヤは何とか地下室へ逃げ込んだ。足音が迫る。アヤは扉を閉ざして鍵を掛けた。

「どうしたら！」

扉にぶつかる複数の音。追いついた賊と獣が、扉を開けようとしているのだ。

「そんなに焦らなくて大丈夫だよ。時間は僕らの味方だし、彼らは確実に報いを受けるから」

焦るアヤと対照的に、男は落ち着いていた。

「問題ない。彼らは僕には手を出せない……絶対」

男は呟くように言うと、アヤに明かりをつけるよう指示した。部屋の中は暗く、男の持つランタンだけが唯一の明かりだった。部屋の奥に向かい明かりをつけたところで、アヤはふいに肩をつかまれ、後ろに引っ張られた。

「扉を開けろ」

野太い男の声が部屋に響き、男も振り返った。アヤは賊に後ろから抱きすくめられ、首筋に剣を押し当てられていた。

「武器を捨てろ」

賊はアヤにナイフを捨てるよう指示した。アヤは仕方なくナイフを足下に落とした。賊はアヤの首を触り脈を確かめた後、彼女の体をまさぐった。アヤは嫌悪感に身を震わせた。

「なるほど、良くできているな」

「それが目的？ 兄さん。どこの盗賊かと思ったよ」

男が尋ねる。男は奇妙なほど冷静で、表情もいつもと変わらなかった。

「お前がさっさと渡さないからこういうことになる」

アヤは自分を捕まえている男を見上げた。髪の色や瞳の色は違ったが、確かに二人の顔は似ているように見えた。しかし、賊は筋肉

質でたくましく、もやしのような男とは正反対の体格をしていた。

「……大したものだ。生きた人間と遜色ない」

「生き人形なんだから当然だろう」

男は小馬鹿にしたような顔をして笑っていた。

「完成したのならなぜ渡さない？父も怒っているぞ」

「完成品じゃないからさ」

「これだけでも十分な成果だ。王に献上すればお喜びになるだろう」
賊はアヤをなめるように眺めた。

「だから、それはあんたらが思ってるようなモノじゃない。大体、ここから連れ出したらすぐに壊れちゃうよ」

「『箱』に入れば持ち運びも保管も出来るだろう。本当は動いているところをお見せしたいが、とりあえずはこれで十分だ。この試作品を研究すれば、魔力が少なくても動く生き人形が作れるようになるだろう」

こいつは私を完全にモノと思っている！アヤはぞっとした。研究対象として連れて行かれたら、何をされるか分からない。何とか逃げないと、アヤは焦った。

「持つて行っても構わないけど、それ、研究の役には立たないと思うよ」

アヤの心を知ってか知らずか、男はニヤニヤ笑いながら二人を見ていた。この人もあてにはできない。アヤは思った。

「なぜだ？」

「だってそれ、人間じゃないし」

「何を言ってる！どう見たって人間じゃないか！」

賊はイライラしたように怒鳴った。

「全くお前という奴は！誰のおかげで禁術の研究や、まともな生活ができていると思ってる！」

「少なくともあんたのおかげじゃないね」

「ふざけるな！この恩知らずが。もういい、とっととその扉を開けろ！」

吐き捨てるような賊の言葉に、男は大げさに肩をすくめて見せた。そして何も言わずに扉を開けた。

扉から二人の男と獣が入ってきた。

「分かっていると思うが、そいつには触るな。連れて行くのは女だけだ」

男達はうなずくと、アヤを取り囲んだ。

戦い

侵入者たちはアヤに武器を突きつけ、近くにあった大きな箱に入るよう指示した。アヤは渋々それに従った。顔を血まみれにした男が、もたもたするアヤをこづいて急かした。恐らくティイにやられた男だろう。

男はそれをただ眺めていた。アヤはそんな男の態度に失望しつつ、何とか逃げられないか思案していた。しかし、どうしたらいいか分からなかった。

アヤが箱に入り、男たちがいいよ蓋を閉めようとした瞬間、不意に男が口を開いた。

「……よく確かめずに事を進めようとするの、兄さんの悪い癖だよ」
侵入者らは手を止め、男を見つめた。男の兄だという大男が答えた。

「何を??っ!」

突然、ビュッという何かが風を切る音がして、部屋の中は男たちと獣の悲鳴で満たされた。ぐちよりという肉のつぶれる音、大きな物が壁に当たる音、何かが碎かれるような音が部屋中に響いた。

断末魔と恐ろしい音に包まれ、アヤは箱の中で恐怖に身をすくませていた。時折箱の上を何かが飛んでいくのが見えた。生臭い匂いが広がり、箱の中にも生暖かいしずくが無数に飛んできた。それは血だった。

やがて部屋は静かになった。アヤは箱からそっと顔を出した。

部屋は血と肉片の海と化していた。床も壁も恐ろしい量の血で塗られ、体中に穴の空いた肉塊が三つ転がっていた。

「アヤ、大丈夫か?」

突然声をかけられ、アヤは凍り付いた。吐き気と恐怖を必死で押

さえながら振り向くと、そこには男とその兄がいた。兄の方は緑色の紐でグルグル巻きにされ、半ば宙づりになっていた。顔は引きつり、目を見開いて、恐怖に喘いでいた。

よく見ると、その緑色の紐はぬめぬめと光り、蠢いていた。アヤは見てはいけないと思いつつ、紐を目で辿った。

扉の前に、何かが居た。それは体中から細い触手を大量に生やした、四つ足の動物だった。顔とおぼしき部分はうねうねと動く短い触手に隠されていたが、そこから覗く金色の目は強い怒りを示していた。口元には大きく尖った牙が、前足には鋭く尖った鉤爪が光っている。男を縛り付けているのは背中から伸びている触手で、その後ろには羽のようなものが見えた。

ひっ、っとアヤは息を飲んだ。彼女の口元は小刻みに震え、歯がぶつかってカタカタと音を立てた。その奇妙であまりに恐ろしい姿に、アヤは気が遠くなるのを感じた。

「大丈夫？」

男の声にアヤははっと振り向いた。男は血にまみれてニヤニヤと笑っている。こっちも正気じゃない。アヤは逃げ出したい気持ちで一杯だったが、足が震えて立つことすらままならなかった。

「おまえ、こんなことをしてただで済むと思ってるのか!？」

宙づりの男が突然喚いた。男は暴れ、触手から逃げようともがいていた。しかし、触手は更に強く男を締め上げた。うっと呻いて、大男は目の前にいる自分の弟をにらみ付けた。

「すまないね、兄さん。でもそっちが乱暴なことをするからさ。テイイは怒ると手がつけれなくてね」

白々しく笑う男に、宙づりの男が目を剥いた。

「わざとらしい真似を……」

「悪いけど、今日はお引き取り願えるかな？彼女については、後日責任を持ってレポートを送るからさ」

「現品がなければ意味がない!」

「さっきも言ったけど、彼女は这个世界の人間じゃない。かなりの

無理をして作った僕の苦心の作だ。魔力をひたすらに消費するだけの、この場所以外では無用の長物さ」

「何を言ってる！」

「兄さんやこいつらがこの城に入れるようになったのは彼女のせいだよ。監察官の連中も勘違いしてたけど、彼女の作成で大量に魔力を使ったからこの周辺の魔力濃度が下がった訳じゃない。彼女は存在するだけで大量の魔力を消費してしまうんだ。だから、なかなか濃度が戻らないんだよ」

「それでは使い物にならないじゃないか！」

縛られた男が喚く。見上げた男は嘲笑の笑みを浮かべ、さっきもそう言っただろうとにべもなく言った。

「下ろしてやるから、大人しく帰ってくれないか……ティイ」

男がドアの前の化け物に声をかけると、それは少しためらってから宙ぶりの男を解放した。解放され、床に投げ出された大男は、そのまましばらくうなだれて座り込んでいた。

アヤは意を決してドアの方を振り向いた。怪物は背中中の触手を遊ばせるように空中でうねうねさせて、兄弟の様子を見守っていた。その目にはまだ怒りが含まれていたが、先ほどより落ち着いているように見えた。

「ティイ、なの……？」

アヤは震える声で化け物に尋ねた。化け物の目がアヤを捉えた。

「……そうよ」

いつもより少し低かったが、それは明らかにティイの声だった。しかし、それはなぜか悲しげな響きだった。そして、うなだれている様にも思えた。怪物はしばしアヤを見つめていたが、やがて立ち上がり、這いずるように背を向けて静かに廊下へと消えた。

何とも言い難い気持ちに襲われていたが、アヤの心は何とか動ける程度まで落ち着いていた。アヤは箱を出て、少し離れたところから男とその兄の様子を眺めた。

大男は座り込んだまま、動こうとしなかった。顔を伏せているため、その表情は分からなかったが、何かブツブツと独り言を言っていた。それは弟への怨嗟の言葉だった。

「兄さん、お疲れのところ悪いけど、早く帰った方が良い。このままここにいとマズい。分かってるだろう？」

男は兄に声をかけた。座り込んだ大男はその声に反応してゆっくりと顔を上げた。その顔は怒りに染まっていた。男の視線の先には先ほどアヤが落としたナイフがあった。

マズい、アヤは反射的にそう思い、二人の方へ飛び出した。ほとんど同時に、座り込んでいた男はナイフを掴み、自分の弟に躍りかかっていた。

アヤは襲われた男を庇うように突き飛ばした。襲ってきた男のナイフはアヤの左腕に突き刺さり、肉を引き裂いた。

「アヤ！」

突き飛ばされ、床に転んだ男が叫んだ。アヤの腕からは生ぬるい血が噴き出し、焼け付くような強烈な痛みが彼女を襲った。失血のせいか、彼女の視界は少し歪んだ。

「やめろ！」

男の声が響いた。目の前の大男はナイフを振りかざして更に攻撃を続けようとしていた。アヤは痛みで気を失いそうだったが、大声を上げて襲いかかる男の腹にタックルした。男は吹っ飛び壁にぶつかった。アヤはそのまま男を押さえつけた。

うおーとうなり声を上げながら男は暴れ、アヤの背中を刺した。

アヤは背中中の痛み可悲鳴を上げた。男を押さえる力が緩み、その隙に男はアヤを突き飛ばし、床に押さえつけて馬乗りになった。

「ふざけるな！」

男の顔は憎しみに歪んでおり、凄まじい形相でアヤを睨み付けた。男は血まみれのナイフを振り上げて、彼女の胸を刺した。アヤはとっさに男の腕を掴み、膝で男の下腹部を蹴り上げた。男は痛みに悲鳴を上げ、力を緩めた。その隙に、彼女はナイフを抜いて奪い取っ

た。

「この野郎！」

男はアヤからナイフを奪おうと彼女の腕を押さえつけようとした。しかし、一瞬早く、彼女は奪ったナイフで男の目を刺した。

「ぎゃああああ」

目を刺された男は顔を押しさえてのけぞった。

「アヤ！」

ティイの声がした。触手が空を切り、男を再び壁にぶつけた。そして、そのまま絶叫する男を縛り上げた。アヤは男やティイのいるところまで、這って逃げた。

「離せ、離せええ!!」

捕らえられた男は狂ったように叫び続けている。その光景はあまりに恐ろしいのに、アヤは目を離すことができなかった。狂っている、アヤは思った。

その時だった、宙づりになり絶叫している男の体に変化が起きた。ぶら下がっている足がだらりと伸び、ぐによぐによとあり得ない場所まで折れ曲がった。縛り上げられている胴体が急に柔らかくなり、ゼリーのようにつぶれた。

「……手遅れだ」

男が呟いた。傍らの男は静かに兄を見つめていた。

「あははははははははは」

絶叫はいつの間にか笑い声に変化していた。顔にナイフを刺したまま、男はゲラゲラと笑っている。

「……ティイ」

男の指示で、ティイは一度触手を緩めた。床に落ちたそれは、不定型な肉の塊だった。アヤは吐き気を覚え、口を押さえた。

肉塊の顔はまだ笑い続けている。触手はそれを床に拘束した。

男が立ち上がり、床に縛り付けられたそれに歩み寄った。

「ごめんよ、兄さん」

一言だけ呟いて、男は肉塊に触れた。

肉塊は次第に膨れあがり、巨大な水風船のようになった。笑い声はまだ聞こえていた。やがてビチャツという音と共に、しばむようにそれはつぶれた。笑い声は消えた。

倒れているアヤの足下にも、どろどろした液体が流れてきた。生ぬるいゲルが彼女の体を汚していった。その色は赤かった。

顔を上げると、アヤは男と目があつた。彼もまた血まみれだった。男の表情を見て、アヤは背筋が凍り付いた。男は笑っていた。

アヤは悲鳴を上げて、気を失った。

夢

気がついたら、真っ暗な水の中いた。

アヤはもがいた。

体は思うように動かず、息も出来ない。

「死にたくない？」

どこからか男の声が聞こえた。それはアヤの知っている声だった。

「死にたくない」

アヤは答えた。

「何を失っても？」

「いいよ。何を失っても」

アヤは答えた。

「ならば、この手を取るんだ」

アヤは何も答えなかった。

気がつくのと、アヤは寺にいた。そこでは両親の葬儀が行われていた。

「生きたいとは、思わない？」

目の前に、男が立っていた。

「生きたいよ。でも、お父さんもお母さんももういない」

喪服を着たアヤからは九つの影が伸びていた。その影の一つがアヤに代わって答えた。

「どうして自分のことなのに、親のことが出てくるのさ？」

「誰かに必要とされなければ、私は生きる意志を継続できなかった」
別の影が囁く。

「友人や恋人だっていたんだろ？」

男の質問に、影たちが口々に呟く。

「私は家族以外、誰も好きになれなかった」

「家族だって本当は好きだったのか分からない」

突然、風景が変わった。そこはアヤの通っていた大学の校舎だった。窓の外に、昔のアヤ、友人、そして恋人が仲良く連れ立っている後ろ姿が見えた。

「あの人のことだって、本当はどうでも良かった」

「彼は女らしい私が好きだと言ってくれた。でも、そんな風に褒められたって気持ち悪いだけで、あれだって、いつも早く終わればいいって思ってた」

「そうだよ。子供なんていらないし」

そう呟いた二つの影は、なぜか他の影より色が薄かった。

また景色が変化した。かつて勤めていた会社だった。

「社会の中で実績を積み、評価されればこの息苦しさは軽減するって思ってた」

「他のものは全部捨てて仕事に打ち込んだ」

「でも、努力が認められても、どんな良い評価を受けても、ちっとも嬉しくなかった」

「お金だけは、残って良かったけど」

他の影の声とは異なり、最後の声だけが少し明るい調子だった。

かつて家族と共に暮らした家。両親と共に燃えてしまった家の中に、アヤはいた。

「両親がいなくなって、初めて気がついた」

「私は両親に自分の生存する意志まで依存していた」

「他の人は代わりにはならなかった」

「仕事もね」

「宗教もそう。ああいうのには関わり合いたくなかった」

「そのうち人と関わることもできなくなって、閉じこもった」

「人と関わるために使ってたエネルギーも、結局は同じところから

来ていたからね」

影は口々に言う。

「でも、引きこもりニート生活もそう悪くなかったよ」
影の一つがケタケタと笑った。

景色が変わる。そこはそれまでとは違う世界の、あの奇妙な城の中庭だった。

「ここで、何を思って生きていたの？」

男はベンチに座っていた。アヤはその目の前に立っていた。

「あなたの役に立ちたいと」

影がぼそりと言った。なぜか影は六つになっていた。

「役に立てると思っていた。でも、それは私の勘違いだった」
どうして？と男が尋ねた。

「あなたは、私と同じで、他人を必要としないから」

「血まみれで笑っているあなたを見て確信した」

「でも、私と違って、他者に依存しないから」

影たちの言葉に、男は矛盾してないかと笑った。

「あなたは元々他人を必要としないし、自分が生きる理由を他者に預けたりもしない」

「でも私は違う。他者を拒絶しているのに、自分の一番根幹のところで、他者を必要としている」

「存在するのに、理由がいるのか？」

男はアヤに尋ねた。

「いないの？」

アヤ自身が尋ねた。

「僕は、いない。他人がどう思おうが関係ない。自分の命の価値なんて、自分だけが知っていればそれでいい」

アヤは何も言えなかった。影たちも黙っている。

「君は生きたい？」

「生きたい」

アヤは口を開いた。

「なぜ？僕は別に君を必要としないよ」

アヤは俯いて唇を噛んだ。

「望むなら君に命をあげよう。でも、僕を存在理由にするな。それ
ができないなら大人しく死んでくれ」

アヤは苦笑した。

「ひどい人。でも、何で私のためにここまでしてくれるの？」

「実は大した意味はないんだ。ただの気まぐれだけでもないんだけどね。まあ、変なところに連れてきて、無理矢理一緒に住まわせて
いるお詫びとでも思ってくれ」

男は冗談めかして言ったが、どこまで本気にして良いのか、アヤ
には判断が付かなかった。

「さあ、それでどうする？」

「死ぬのは嫌」

アヤははっきりと答えた。

「そうか。なら、君にもう一度チャンスをあげよう。ただ、一つお
願いがあるんだ」

「何？」

「君が生き人形になってしまったことを、生まれたのとは別の世界
に生きていることを、僕と共に生きることと心から受け入れたら、
僕の名前を呼んでくれ」

「名前？」

「そう、僕の名は……」

アヤは突然光に飲まれた。目の前の男に手を伸ばすと、それはな
ぜかアヤ自身の姿になっていた。そして、光に照らされた彼女の影
になった。

対話

頬に柔らかなものが触れたので、アヤは無意識に手で振り払った。しかし、再び柔らかいものが頬に当たる。ぺちぺちと、今度は一度でなく、何度も繰り返して頬を叩く。もうちょっと眠っていたいの、アヤは鬱陶しげに目を開いた。

「……ティイ、しつこい」

目を開けると、やはりそこには猫がいた。ティイはアヤの顔をのぞき込んだ。

「おはよう。お加減はいかが？」

「まだちょっとだるいけど、大丈夫よ。それより私、どのくらい寝ていたの？」

「一月ほど」

「え、そんなに！」

猫はアヤの枕元から飛び降りて床に座った。アヤは上半身を起こして伸びをした。ティイはアヤの顔をじっと見つめていた。アヤは不審に思ったが、何も言わなかった。

「……あんたに手を下すことにならなくて良かったわ」

ティイが小さな声で呟いた。

男はまたもアヤの発狂を警戒していたのだろう。最初に目覚めた日、ティイがやはり目の前にいたのも同じ理由からだと言っていた。あんなことの後だ、おかしくなっているのも仕方はない。だから、手がつけられなくなる前に殺す。実に分かりやすい。

「私、SAN値が高いのよ」

通じる訳のないジョークを飛ばし、意味が分からないという顔の猫を横目に、アヤは自分の体を確認する。切られたはずの腕にも、刺されたはずの胸にも傷跡一つなかった。恐らく背中中の傷も消えているのだろう。

「すごく綺麗に治ったのね。本当に便利な体だわ」

「旦那様と私の苦心の作よ！感謝しなさい」
ティイはむっとした顔でアヤを睨んだ。アヤは苦笑して、感謝の言葉を述べた。

猫は忙しいから後でまた来ると言って、部屋を出て行こうとした。しかし、ティイはドアの前まで来たところでアヤを振り返り、小さな声で尋ねた。

「……ねえ、私が怖くはないの？」

ティイは顔を下に向けていて、アヤからは表情が見えなかった。「それほどでもない、かな」

アヤはあの怪物を思い出して、背筋に少し冷ややかな物を感じた。しかし、それでも目の前の生き物を怖いとは思わなかった。

「そう……」

ティイはほっとしたような、でも納得がいけないというような顔をしていた。アヤを見上げて、ティイは神妙な顔つきで呟いた。

猫はまた後でねと言い残し、部屋から出て行った。

一人になった部屋で、アヤは先ほどまで見ていた夢を思い出していた。

夢を見るのは久しぶりだった。この世界に来てから、彼女は夢を見なくなっていた。それが生き人形になったためなのかは分からない。

あの夢は何だったのだろう。彼女は考えた。喋っていた影たちは、彼女の心の代弁者だった。しかし、影はそれぞれに特徴を持っていたような気がした。夢は無意識の現れだったと言ったのは誰だったか。アヤは思った。先ほどの無意識の発現とするには具体的すぎる夢だった。

寝返りを打った時、アヤはふと昔読んだ本の一節を思い出した。人間の命は一つだが、魂は複数あるという？？

突然ドアが開いた。男が入ってきた。一瞬、あの襲撃の夜を思い出し、せめてノックぐらいしてほしいとアヤは思った。

元氣そうで良かったと男は言った。男はアヤを診察し、異常がないことを確かめた。

「体の方はもうしばらくすれば大丈夫そうだね」

「ありがとうございます」

アヤが頭を下げると、男はうんざりした表情で言った。

「……ああいう荒事はもう止めてくれ。再構成と再調整は面倒だ」

「すみません」

「分かってくればいい。非常事態だったし、巻き込んでしまって君には申し訳ないとも思っている」

「そんなことは」

「まあ、今回のことで、君も色々事情を知ってしまった。申し訳ないが、今後は君にも協力してもらうことが増えるだろう……まあ、とにかく、二、三日は念のため休んでいるように」

「分かりました。ただ、ちゃんと説明はして頂けませんか」

「いいよ。何が聞きたい？」

アヤには聞きたいことは色々あった。しかし、まず聞くべきは……

「なぜ、あの人は化け物……いえ、あの、姿を変えたの？」

アヤの脳裏に、男の兄の変わりゆく姿とその末路が浮かんできた。彼女は吐き気をこらえるように歯をかみしめた。

「姿を変える、ね……何で化け物になったかといえば、ここの魔力にあてられたからだよ」

男は楽しげに言った。しかしその目は笑っておらず、アヤは自分が観察されていることに気づいた。

「あてられた？」

アヤの疑問に、男が答える。

「中毒になったとも言えいいんだろうか？ここは魔力が強すぎるんだ。強すぎて、普通の生き物は長くいるとその影響を受けてしまう」

「でも、私もあなたもティイだって、ずっとここにいるじゃないですか？」

アヤの当然の疑問に、男はこともなげに言った。

「僕は少々特殊な体質でね。大量の魔力にも耐えられる身体を持っている。仕組みは違うけど、ティイも同じだ」

「どういことですか？」

「僕は周囲の魔力を集め、体に蓄えてしまう体質でね。そのせいで、普通なら耐えられないような高濃度の魔力にも正気を保っていられるし、体が化け物に変化することもない」

アヤは男の言っていることが分からず、眉間にしわを寄せて男の言葉を聞いていた。

「この場所は、この世界でも有数の魔力地帯でね」

「それは以前聞きました。魔力の特異点だとか」

「そう。だから、人間も動物も滅多にこの草原には入らない」

「……何でそんなところに城があるんですか？」

「ここはかつて古戦場だった。ここはその時使われた砦だ」

城は見晴らしの良い高台にあり、場内からは草原を三百六十度見渡すことが出来た。沢山の質素な部屋や殺風景な中庭の様子を思い出し、アヤはここが砦だという言葉に納得した。しかし、問題はそこではない。

「何でここで戦争をするんですか？ 魔力は生き物にとって有害なんでしょう？」

アヤの疑問に、男はさらりと言った。

「その時は、ここは魔力の薄い地だった」

「はあ」

「五百年ほど前、ここで戦争が行われていた時のことだ。突然空から強力な魔力が降り注いだ。伝説によれば、空が虹色に輝くと、戦場の生き物は皆異形に姿を変えたそう。逃げ延びた者も大半は正気を失ったという」

男は窓から外を眺めていた。つられてアヤも外を見る。いつもの

おだやかな草原だった。

「混乱のうちに戦争はひとまず終結した。しかし、場所によって強弱はあったが、世界は強力な魔力によって浄化された」

「じよ、浄化？」

深刻な事態とは似つかわしくない言葉に、アヤは思わず呟いた。

「そう、浄化。僕らの宗教ではそう言っている。争いを続ける人間に神が罰を与えたのだと。そして、選ばれた人間だけが生き延びたのだとね」

黙示録がリアルで起こったようなものだろうか。アヤはポカンとして男の言葉を聞いていた。

「……全く馬鹿げた理屈だけどね。ただ、実際生き残れたのはその時の人口の一割程度だった」

「たった一割……」

「一割も、だよ。魔力にある程度耐性がある者が、魔力の弱い地で、魔術を駆使して何とか生き残ったんだ」

「魔術は元々あったんですか？」

「あった。元々、極々弱い魔力がこの世界には存在していた。だから、魔力の流れをコントロールしたり、観測して住める場所を探すくらいのことはできたんだ」

壮大な話に、どこまで本当なんだろう？とアヤは少し疑問に思った。男はそんなアヤの表情を見て、少しだけ笑った。

「まあ、信じられない気持ちは分かるよ。とにかく、その時から世界は格段に強い魔力にさらされることになった訳さ」

はあ、とアヤは間の抜けた相づちを打った。窓から入ってきた風が、二人の髪を揺らした。

「……魔力は人や生き物に強烈な影響を及ぼす。そしてこの場所は魔力が強すぎる。だから、ここにいると普通は狂うか化け物になる」頭を整理するために呟いたアヤの言葉に、男が頷いた。

「じゃあ、何であの人たちや、査察官はここに来られたの？そもそも来ようと思ったのはなぜですか？そんな危険な場所なのに」

アヤの言葉に、男はニヤリとした。

「一つは君の作成および調整に魔力を大量に使用したからだ。一時的に魔力濃度が極端に低下したから、その時に査察官が来た」

「この間の人たちは？査察官が来てから、結構時間が経ってますけど」

「君が消費する魔力が予想外に大きくて、中々濃度が上がりきらなかった。そんな状態で転移魔術を使ったから余計に濃度が下がった。普通の人間でもしばらくはここに留まれる程度にね。……あいつらは買った荷物の中に紛れていたんだ。濃度が薄くなったから、夜までの間、彼らはここに隠れていられた」

男の言葉にアヤは愕然とした。自分の存在が彼らを危険にさらしてしまったのだ。アヤの心中を察したのか、男が言った。

「ああ、君のせいじゃないから。むしろ、君は自分の役割を果たしただけだ」

「どういうことですか？」

「僕が生き人形を作ったのは、魔力を消費することが目的だったからさ」

「何、それ？」

男の思いがけぬ言葉に、アヤは戸惑いの声を上げた。

「ここに来て発狂もせず、化け物にもならなかった僕には、いくつかの課題が与えられた。ここは魔力の特異点で、そこに魔力貯蔵庫の魔術師が住み着いたんだ。することは一つ。魔術研究さ。研究をすることで僕は生きる糧を得ている。実際、いくつか成果を出しているし、それが国王にも伝わって、僕は禁術の資料も与えられたんだ」

アヤは目を見開き、男を見つめて、次の言葉を待った。

「僕に与えられた課題は色々あるんだけど、その内の一つが人間の生き人形作成だ。後、魔力濃度を下げろってのもある。君を生き人形化することで、二つの課題を同時にこなしてみただ」

アヤはあまりのことに言葉もなかった。そんな理由で自分を作っ

たのか、あれこれ悩んだのが馬鹿みたいだと、彼女は内心頭を抱えた。

そんな彼女の気持ちを知ってか知らずか、男は更に続けた。

「そんな訳で、君をここに置いている。君を起こすのに一ヶ月もかかってしまったのは、魔力濃度を十分に上げるためだ。ここに人が入れるようになるのろくな事にならないのが分かったしね」

「……」

「君の体を修復するついでに、魔力の消費量を抑えるように改良を加えた。これで、多少大きな術を使っても、魔力濃度は最低限保たれるだろう」

男の説明に、アヤは急速に色々なことがどうでも良くなっていった。彼女はがっくりと肩を落とし、あははと乾いた笑いを漏らした。男は相変わらずその様子を観察していた。

無言になったアヤを見て、今日のところはこの位にしよう、と男は席を立った。男の後ろ姿を見つめていたアヤだったが、ふと思いついて声をかけた。

「最後に、一つ聞いて良いですか？」

「何？」

男はドアの側で振り返った。

「……あなたはなぜここに来たの？」

アヤの質問に、男はわずかに顔をしかめたが、すぐに表情をいつものニヤニヤ笑いに戻した。

「さっきも言ったけど、僕は魔力を集めて蓄えてしまう特殊体質だ。昔は平気だったんだけど、成長するに従って、近くの人や環境に良くない影響を与えるようになった。魔力をコントロールすることで何とか押さえていたんだけど、遂には触るだけで人や生き物を壊せるようになった」

「……」

「うちは、代々魔術師の家系でね。厄介払いと実験を兼ねて、僕を

ここに住まわせることにした」

「実験？」

「そう。……魔力に強く汚染された地で、僕が生きていけるかを見るために。もしダメでも、ここからはそう簡単に家にも町にも帰れない。おかしくなって死ぬだけだ」

「ああ、なるほど」

得心がいったというアヤの言葉と表情に、男が苦笑した。

「随分軽いね。少しは同情してくれないの？」

何と言ったらいいのか分からず、アヤも苦笑した。

「いや、その合理性はあなたが私にしたのと同じだし……」

男は分からないというような顔をした。

「私がおかしくなっていたら、ティイに殺させるつもりだったんですよ？」

アヤの言葉に、男の顔がわずかに歪んだ。男はハッと表情を殺し、アヤに背を向けると、そのまま出て行ってしまった。

「お互い様だわ」

アヤはそう呟くとケタケタと笑った。どうしてか笑いが止まらず、彼女は笑い続けた。なぜか涙も浮かんできたが、彼女は泣きながら笑い続けた。

名前

数日後、元気になったアヤは、再び元の日常に戻った。体を鍛え、読み書きを勉強し、できない魔術を練習する平穏な日常だった。また、アヤにも一つ仕事が与えられた。城の掃除だ。これまで家事をほとんどこなしていた自動人形が壊れてしまい、修理が終わるまでは城の中のことをほとんどできなくなってしまっていた。

男と言えば、仕事が忙しいと言ってほとんど姿を見せなかった。たまに会うと、きまって青白い顔に不機嫌そうな表情を浮かべていた。

ティイによれば、この間の一件であちこちに脅しをかけて、これ以上の面倒が起らないように釘を刺して回っているらしい。人間嫌いの男が人間を避けるために人間と交渉している。面倒なことだ。アヤは男に同情した。

しばらく経ったある日、中庭で本を読んでいたアヤのところに男と猫がやってきた。自動人形が直ったので彼女の仕事は減っていた。男はいつものニヤニヤ笑いを浮かべ、お茶を飲むけど一緒にどうかと誘ってきた。

修理が済んだ自動人形が、いつも通り茶器と茶菓子を運んできた。アヤは戯れにお茶を一口飲んだ。相変わらず酷い味で、彼女は顔をしかめた。

「そんなにマズいの？」

ティイが面白そうに笑う。白い毛がふさふさと風に揺れ、アヤはその下の本体を思い返した。

「マズい。食べなくても平気な体で良かったと心から思うわ……」
アヤは水で口の中に残った味を流し込んで答える。それは良かったと、男が楽しそうに笑った。

「でも、マズいって感じるのは体がそれを口にしちゃいけないと判

断したと考えられるのよね……もしかしたら、私を構成している物質とこの世界の生物を構成している物質は違うのかもしれないね」
「違うみたいだね。この間調べてみたが、君の体の組成は我々とは異なっていたよ」

男があっさりと言った。男は美味しそうに茶菓子を頬張っている。違う世界の生き物だ。タンパク質やらDNAやらの構造や仕組みまで同じだったら、その方が気持ちが悪いとアヤは思った。

「この世界の生き物は、何でできてるんですか？」

彼女の質問に、男はいくつかの物質名を述べた。しかし、彼女にはそれが自分の知っている物質なのかそうでないのかの判別は付かなかった。

この世界に関するアヤの語彙は、彼女の魂に混じった男の魂に依存している。日常的に使う基本的な言葉はおおよそカバーできているが、専門用語となるとやはり話は別だ。先ほどの物質名も、彼女には音としてしか伝わらない。アヤの持っている語彙に、当てはまるものがないのだ。

君の知らない物質？と男が尋ねた。はい、と彼女が答えると、男はふーんという顔をする。その表情は相変わらずわざとらしく、アヤは自分の世界を馬鹿にされたような気がして、少しだけ腹立たしかった。彼女は水を飲んで苛立ちをごまかした。

「そういえば」

アヤはふと思いついて口を開いた。

「一つ聞きたいことがあったんです」

男と猫がアヤの顔を見た。何だい？と男が聞き返した。

「魂の構造と性質について」

男はお茶をすすって頷いた。アヤは話を進めた。

「魂は分割できると以前お聞きしました。その分割されたものは、全て同じ物ですか？」

アヤの質問に、男は菓子を食べながら答えた。

「分割された魂の性質のことか？元は一つの物を割ったんだ、基本的にその性質は同じはずだ。そう考えて、我々は魂を扱っている」
「もし、違うとしたら？」

男は眉をひそめてアヤを見つめた。

「最近思い出したことがあります。私の世界での魂に関する説明の一つです」

「どんなもの？」

ティイも興味深そうに彼女を見ていた。

「人の魂は性格の異なるいくつかの魂の寄せ集めだという話です」

「……興味深いね。性格が違うとはどういうこと？」

男はアヤの話に関心を持ったようだった。アヤは口を開いた。

「その前に一つお聞きしたいのですが、魂の性質は精神？？性格に影響しますか？」

「魂は精神、肉体共に深く関係し合っている。当然影響していると考えるのが妥当だね」

男の言葉に、アヤは頷いた。自分の考えと矛盾はしない。彼女は説明を続けることにした。

「人間には様々な一面があります。例えば、私の場合なら、社会の一員である自分、子供……娘である自分、女である自分、研究者であった自分、などがそれに当たると思います。一人の人間が魂を複数持っているから、こういう多面性が生まれるのだと」

「……一人の人間には多様な一面があるが、それを担保しているのが魂の複数性である、という解釈で良いのだろうか？」

「そんなところです」

「なかなか面白い説だね。ただ、実際の観測結果として、魂は混じり合うし、分割した一部を喪失してもそれほど問題はない。それは君も実感として良く分かっているんじゃないか」

「純粹に割り切ることはできないんだと思います。それぞれの魂は常に干渉しあって、お互いの情報をやり取りしあって、最低限の情報をバックアップし合っているんでしょう」

男はしばし考え込み、やがて口を開いた。

「確かに、魂にどんな情報が含まれているかというのは解析が難しい。必要な情報を引き出すことはできるが、どんな情報を持っているか、完全に開示させられるのはその持ち主だけだ」

いつの間にか、男は菓子を食べる手を止めていた。表情は真剣になっていて、いつもの作り笑いとは違っていた。

「……外部から情報を観測すれば魂は失われてしまう。だから、君の説を証明することは難しいだろう」

「別に証明したい訳じゃありません。ただ、こう考えると説明がつくことがあるんです」

「それは何だ？」

「……私が生き人形になっても狂わなかった理由です」

男と猫は、アヤの顔を見つめた。男は少しだけ驚いたような顔をして、その後笑みを浮かべ、口を開いた。

「面白いね。話してみて」

「……ただの素人の仮説ですよ、構いませんか？」

「魂の喪失と混入という貴重な事象を経験した者の意見だ。聞くに値すると思うんだけどね」

アヤは少しだけ考えて、口を開いた。

「私はここに来て蘇るまでの間に、魂の一部を失ったそうですね」

「そうだね」

「私が失ったのは、多分、自分が『生物』であるという認識や元の世界の一員であるという意識を強く持った部分かと思っています」

二人は静かにアヤを見つめていた。

「だから私は、私の知っている『生物』ではなくなってしまった自分を受け入れ、ここになじむことができたのでしょうか」

「単純な感情の問題じゃないの？生きていて嬉しい、とか、別の世界に来られて嬉しい、とかの」

ティイが口を挟んだ。

「違うと思います。……より正確に言えば、私は向こうにいた時か

ら生き物として死につつあったんです。だから、精神と魂が弱っていた」

「何よそれ」

猫が不思議そうに尋ねる。見れば、男もよく分からないという顔をしていた。

「私は自分が『人間』の『女』であるという実感が昔から薄かったです。だからといって、他の動物や『男』になろうとは思いませんでしたが。多分、これは私の魂の性質による気がします」

アヤは自嘲気味に笑い、目を伏せた。

「……昔から私は世界が、他人が怖かった。気を許したら、自分が飲み込まれて壊される気がして……だから、私を守ってくれた両親の望むように、自分の形を作って、その内側に自分を隠しました」

アヤは目を伏せたまま続けた。

「両親が死んで、私は今まで自分を守っていた鎧を失ってしまった。維持する力をなくしてしまっただけです。結果、社会や人との関わり方が分からなくなってしまいました」

ふうっとひとつため息をついて、彼女は続けた。相変わらず目を伏せたままで、男や猫の反応は見なかった。見たくなかった。

「……魂という概念が実在すると知り、私は思いました。自分のかしさの理由をやっと説明できるのではないかと」

アヤが目を上げると、男と猫が黙って自分を見ているのに気づいた。自分の話を真剣に聞いてくれているのが分かった。

「私はずっと、自分の体を機械みたいだと思っていました。自分は、他の人が普通に持っているモノを持っていない、人間ではない物体なのではないかと」

アヤは軽く息を吸った。呼吸は今の彼女に必要な行動だが、深呼吸すればやはり心が落ち着く。

「科学を勉強しようと思ったのも実はそれが理由の一つです。もっと合理的に、自分を理解できるかも知れないと思って。精神医学や心理学の本もいろいろ読んでみたけれど、結局、自分のおかしさを

はつきりとさせることはできませんでした」

「誰かに話したことはないの？」

男が静かな声で尋ねた。アヤは首を横に振った。

「親や友人に、それとなく尋ねたことはあります。ですが、彼らには私の言いたいことは伝わりませんでした」

誰にも自分の恐怖を理解はしてもらえない。この絶望感彼女を苦しめ、人から遠ざける理由にもなっていた。

「ここに来て、体が変わって、自分の感じていた自分のおかしさ？ 違和感の理由が初めて分かりました。……私は最初から人形だったんです。だから、『人間』の体に違和感を感じてたんです」

「あんた、何を言っているの？」

ティイが呆れたように聞いた。まあ分からないだろう、とアヤは内心苦笑する。自分にだって、最近まで分からなかったんだから。彼女は心の中で呟いた。

「外から見える私は、元々操り人形なんです。私は自分を守る鎧の中から指示を出して、鎧を介して自分を操っていた。だから、鎧がなくなって、私は自分が制御できなくなったんです。……鎧は変化を嫌います。限られた人間関係と狭い環境の中で、私は自分を必死で守っていました。両親が死ぬ前の私だったら、多分今の状況に絶望に嘆き悲しんでいたと思います。あなた方が予測していたように、発狂していたかも」

男が苦笑いを浮かべる。

「じゃあ、何で今の君は正気なんだ？ 正気に見えて、実は狂っているのか？」

男の問いに、アヤは薄く笑みを浮かべた。

「正気と狂気の境なんて曖昧です。あなただって自分が正気だと胸を張って言えますか？」

男はふっと鼻で笑い、僕は正常だよ？と言った。

「正常なあなたが私を正気だと言って下さるなら、私もきっと正常です」

彼女は水を飲みながら答えた。

「……私が正気でいられるのは、今まであやふやだった自分の身体を『生き人形』という形で定義できたことと、内部から自分を見つめる他者の視線を獲得できたことが大きいかと思います」

「他者？」

男は眉をひそめた。アヤは男の目をまっすぐに見つめ、言った。

「あなたですよ。シッセ・ヴィティカさん。もっと正確に言うなら、私の魂に混ぜられた、あなたの魂だったモノ、です」

挨拶

「ああ、良かった。名前を呼んだら何か起こるかもしれないと思って、ちよつとドキドキしてたんです」

中庭を包んだ静寂を破ったのは、アヤだった。男も猫も不意を突かれ、ギョツとして固まっていた。彼女は二人の様子を見て、微かに笑った。

「名前に関してはお二人とも随分と意味深な行動でしたから、何かあると思ってましたが、違うんですか？」

「……いや、単に魂の定着具合を試すためだ」

男の顔にはまだ狼狽の跡が残っていた。それをごまかすように、男をカップを手にして口元へと運んだ。

「ああ、私があなたの魂由来の情報を認識できるか、ということですか」

私は色々考えすぎていたのかもしれない。彼女は改めて思った。

「……話は戻るが、なぜ、僕の魂が君の正気を保つ役に立つんだ？」

男が口を開いた。奇妙なことに、その表情は不安そうに見えた。

「それを説明するのはなかなか難しいのですが……私の魂に混ざった完全な『他者』が、内側から『私』を定義してくれるから、とでも言えば良いんでしょうか」

それに、とアヤは付け加えた。

「他人を受け入れても、自分が壊れないのが分かったからです」

男の目が一瞬、揺れた。

「それが、僕の魂でも？」

アヤは男の目を見据え、うなづいた。

「あなたのくれた魂は、確実に『私』を支えてくれています。だから、私は『自分』を保って、正気でいられるんですよ……」

中庭に静寂が戻った。アヤはふっと静かに息を吐いて、目の前の

男と猫を見ていた。二人とも眉を寄せて考え込んでいて、何とも言い難い顔をしていた。猫がこういう顔をしていると可愛いな、とアヤには若干場違いなことを考える余裕もあった。

正直、自分でも説得力にかける理屈だとアヤは思っていた。それでも、考えを正直に口にしてみれば、その言葉は彼女を納得させた。現在の自己の状態について、かなり適切に説明できたのではないだろうか。彼女はやりきった満足感すら覚えていた。アヤはコップに水をつぎ足し、口に含んだ。

そのうち、男がおもむろに口を開いた。その顔にはいつもの作り笑いが浮かんでいた。

「生き人形作成の一番の問題は何だと思う？」

唐突な質問にアヤは面食らったが、素直に分からないと答えた。

その答えに、男がニヤリと笑った。

「被験者が大抵発狂することだ」

「は？」

「死んだ人間を生き返らせる術が禁術と言われるのも、実はこれが原因なんだ。魂も体も同じなのに、再び生き返ったモノは、どういう訳か皆おかしくなっている。意思疎通を図って成功したケースすら稀だ」

男の説明によれば、アヤの前にも小動物で何回か似たようなことをしたらしい。しかし、ほとんどは目覚める前に死に、たまに目覚めても狂って暴れるだけだったという。

「暴れられると小動物でも結構厄介なんだよね。死んじゃう方がマシだったよ、本当に」

男はウンザリした顔で言った。猫もうんうんと頷いている。しかし、これにはさすがのアヤも呆れた。

「そんな状態で、よくも私を被験者に……」

「だからさ。どうしても人間で試したかったんだ。精神は肉体よりも魂のありように強く影響を受ける。だから、問題が魂にあるのは

分かった。人の魂なら意思疎通も何とかできるし、情報も比較的容易に取れるしね……」

「こちらの人間では試さなかったんですか？死体くらいなら用意してもらえば……」

アヤの質問に、ティイがムツとして答えた。

「さすがにそこまではやってないわ。新鮮な人間の死体なんて簡単に手に入るものじゃないし」

「でも、この間の連中は私が生き人形だと知ってましたよね？その材料をどこから入手したと考えていたんでしょうか？」

二人が黙った。ああ、この人たちは何かやってる。アヤは生暖かい気持ちになり、深入りは止めようと思った。今後もしれば関わりたくない。

「まあ、それはどうでもいいです。それより、なぜ発狂してしまうんでしょう？」

クッキーをつまみながら、男が答えた。

「一般的に、魂の持つ身体イメージと実際の身体イメージが異なってしまうことが原因じゃないかと考えられている」

彼の説明によれば、人間の魂を動物に入れても魂は定着しないし、その動物は動かない。逆に動物の魂を人間に入れてもダメだという。

「魂が肉体を受け入れることができれば、それに影響される精神も肉体を受け入れられず、結果として発狂してしまうんじゃないかな。君も見ただろ？魔力で精神も体も狂ったあいつを……」

男の目が怪しく光った。アヤはあの光景を思い出しそうになり、軽く目を伏せた。

「精神が肉体の変化に耐えられるかどうかは、それを支える魂次第ともいえる」

なるほど、アヤは納得してうなづいた。

「では、先ほどの説明はあながち間違っていないかもしれないということになりますね」

そうだね、と男と猫は同意した。なぜかその顔は曇っていた。そ

の理由は、アヤには分からなかった。

再び、中庭を沈黙が包んだ。

柔らかな風にすがすがしさを感じて、アヤは空を見上げた。壁に丸く切り取られた薄い水色の空は、彼女の故郷のそれとは違っていた。

やがて、彼女は残りの水を飲み干し、口を開いた。

「それで、私はこれからここにいて良いのでしょうか？」

「構わないよ。でも、それでいいのか？」

「何がですか？」

なぜこんなことを聞くのだろう。アヤは疑問に思った。

「君は壊れるか、僕が死ぬまでここにいることになるよ。僕とティイと他には人形しかない、この城で」

「分かっています」

娯楽も少ないし、退屈はするかもしれない。それは彼女にとって大した問題ではなかった。でも、彼女の答えに男は納得していないように見えた。もしかして……と彼女は呟いた。

「私は邪魔ですか？」

「そういう訳じゃない」

アヤは男の意図するところが全く分からず、困惑した。

「……あなた方からすれば人形が、一つ増えるだけでしょう？」

彼女は二人を交互に見つめて言った。

「大したことはできませんが、私ができることは自分だけですし、もちろんお二人のお手伝いも喜んでやりますよ」

「……あんだ、本当にそれでいいの？」

ティイがたまらないという感じで口を挟んだ。

「私は魔力を消費するためだけに作られた、機械みたいなものなのでしょう？」

「まあ、確かにそう言ったが……」

「あの言葉を聞いた時、私はもう『人間』になる努力をしなくて良

いんだって、そう思いました」

「……」

二人は黙って彼女を見ていた。

「あなた方がそれをどう思うかは知りませんが、それは私にとって救いだったんです」

男は困惑し、ティイは呆れたような顔をしていた。アヤはその顔を見て、少しだけ笑った。

「だって、人間のふりをしていた人形が、本物の人形になれたんですから」

アヤの言葉を聞き、男と猫はなぜか下を向いて黙っていた。何なのだろう、この反応は？ 訳が分からないまましばらく様子を見ていたアヤだったが、やがて微妙な沈黙と重苦しい空気に耐えきれなくなった。彼女はこの場を退散しようと席を立った。

立ち上がった彼女を、二人が見た。その視線に、アヤはいたたまれないものを感じた。自分はよっぽど変なことを言ってしまったのだろうか？ 彼女はわずかに後悔した。でも、言いたいことは全部言えた。ずっと誰かに聞いて欲しかったことを言葉にできた。心の中で鬱屈していた淀みが取れたような気がして、彼女は爽やかな気分すら感じていた。

「疲れたので先に戻ります」

彼女はそう言ってから、ふと思いついて右手を男に差し出した。

「今後ともよろしくお願いします」

そう言って軽くお辞儀したアヤを、男は困惑の表情で見つめていた。どうしたらいいか分からない。男の顔は明らかに動揺していた。差し出した手の収まりが付かず、アヤも少し困った。ふと横を見ると、ティイもまた当惑の表情を浮かべていた。ああ、もしかしてと、彼女は口を開いた。

「握手です。握手。私の世界の非常に一般的な挨拶です」

こういう習慣はないんだろうと彼女はあたりをつけた。彼女の言

葉に、男は戸惑いの表情を浮かべたまま、おずおずと手を差しだしてきた。アヤは男の手を軽く握った。屋外に長時間いて冷えたのだろう。その手は乾いていて少し冷たかった。

なぜか狼狽している猫にも、アヤは手を差しだした。柔らかな肉球が手のひらに軽く触れられた。

「それでは、お先に失礼します」

アヤはそう告げると、困惑したままの二人に背を向け、自室へと戻った。

気づき

それから三日が経った。

男や猫は彼女の前に自分から姿を現すことはなかった。一度廊下でティイを見かけたことがあったが、猫はアヤに構っている暇などないという風にあつという間にいなくなっていまった。しかし、それはこれまでも何度かあったことで、アヤは全く気にしてはいなかった。彼女はいつもの通り城の一角を掃除し、その後は本を読んでいた。

昼が過ぎた頃、アヤは読んでいた本を閉じ、ベッドから起き上がった。この時間帯、彼女は暇があれば中庭に行くのが日課になっていた。中庭は涼しく快適で、夕方まで時間を過ごすのに最適の場所だった。また、図書室が近いという利点もあった。

部屋を出て廊下を進み、階段を下りる。城の中はしんと静まりかえっていて、相変わらず人の気配がない。自分以外誰もいないのではないかと思うほどだ。この城は孤独が嫌いな人にはとても怖い場所だろう。

中庭にも人の気配はなく、アヤはベンチに腰を下ろした。時折、自動人形が回廊を行き来する音がする以外、物音はほとんど聞こえてこない。静寂が支配し、時間が止まったような場所で、彼女は一人ページをめくった。

読み書きはかなり上達し、アヤは一人でもある程度の本を読み通せるようになっていた。とはいえ、それはこの世界の学問の子供向け教科書や、図鑑のような図表が中心の本だけである。もっと色々なジャンルの本を早く読めるようになりたいと彼女は思っていた。彼女は子供の頃から本の虫であった。

しかし、アヤには一つ不満なことがあった。彼女にはこの世界の『物語』が読めなかった。正確に言えば、読めないのではなく理解できなかった。

城の図書室には、小説など文芸作品も何冊か置かれていた。今読んでいるのもそういう作品の一つだった。この世界では古典的なもので、本当なら子供でも読み通せるものらしい。しかし、彼女にはどうにも意味が分からない。ストーリーらしいものは何とか押さえることができるが、理解できない単語が多い。また、細かいエピソードを把握できなかった。

分からない部分を読み飛ばし、何とか読み進めていたアヤだったが、そのうち、彼女はストーリーを追いかけることもできなくなった。アヤは諦めて本を閉じた。

ストーリーはよくある英雄譚で、この世界の成り立ちを示した神話のような内容だった。彼女は元の世界でそれこそ数え切れないくらい、この手の物語を読んでいる。なぜ読み通すことができないのか、彼女には不思議だった。どういう訳か、このようなことは、なぜか学問に関する書籍ではあまり起こらない。図鑑でも読もう、そう思い直して、アヤは図書室へと向かった。

図書室に通じる扉は、中庭に面した回廊の一角にある。扉を開けると、古い紙の匂いがアヤの鼻をくすぐった。一瞬、彼女はかつての自宅の書斎を思い出した。

図書室の本の配置はかなり適当で、ある程度のジャンル分けがされているだけだった。沢山の本棚が所狭しと並び、そのどれにも隙間なく本が詰め込まれている。入りきらなかったのだろう、床にも本が積まれている。アヤは隙間を縫ってそつと移動した。

読んでいた本を戻して、アヤは別の本を物色し始めた。どの本を見ても良いという許可はもらっていたが、持ち主である男に迷惑をかけないよう、彼女はその配置をできるだけいじらないようにしていた。一見、本は適当に積まれているようだが、恐らく男はどこに

どの本があるかおおよそ配置しているはずだ。それは彼女自身の経験からも分かっていた。

ふと、彼女は傍らに本の山に目を留めた。それは『生物の構造』というタイトルの立派な本だった。手にとってぺらぺらとめくると、様々な生物の写実的な絵や解剖図が載っていた。これにしよう、アヤはそれを持って再び中庭へと移動した。

アヤはテーブルに本を置いて開き、ぼんやりと絵を眺めた。その中には鳥や猫のようにアヤにもなじみのある生き物から、手足の生えた蛇や角を持ったずんぐりした馬など、沢山の生き物が紹介されていた。

この世界の生き物にも、基本的には雄と雌があった。雄が配偶子を雌に渡し、子を為す。この仕組みは基本的にはどうやら同じらしい。また、生物の基本構造？口、消化管、肛門という筒状の構造？？も、元の世界と共通していた。もうちょっと違っていても良いのに、彼女は何となく思った。

ページを繰っていくと、人間の項にたどり着いた。全裸の男女が描かれている。外見の特徴は基本的に同じように見えた。解剖図を見ると、内臓の構成や種類、形はアヤの知る人間とはやや異なっていた。ああ、やっぱり違うんだ、と彼女は少し嬉しくなって、解剖図とその注釈をじっくりと眺めていた。

その時、かすかに足音が聞こえて、彼女の思考は現実呼び戻された。音の方向に目を向けると、白い髪の男が歩いているのが見えた。

この間の一件もあって、アヤは何となく気まずさを感じた。こっちに来ないと良いんだけど彼女は思った。しかし、彼は彼女に気づくと、なぜか中庭へと足を向けた。

「やあ」

男が声をかけてきた。その表情はいつもと変わらず、アヤも軽く

頭を下げた。

「こんにちわ、シッセさん」

シッセと呼ばれた男の顔が一瞬こわばったのを、彼女は見逃さなかった。しかし、男の感情はいつもと同じ薄笑みに隠されてしまった。

「『生物の構造』か。生物学の名著だね……それ、面白いだろう？」

「はい、そうですね」

男はテーブルに置かれた本を見やった。開かれたページの『人間』の絵に、男はニヤリと笑った。

「『人間』に興味があるの？」

「当然気になりますよ。だって、別の宇宙に生き物が、しかも自分の種に似た別種の生物がいたんですよ。気になって当たり前じゃないですか」

「……」

なぜか男の表情が少しだけ曇ったように見えた。なぜだろうとアヤは一瞬思ったが、すぐに勘ぐるのを止めた。気になっていた疑問を男にぶつけるチャンスであることに気づいたのだ。

「これってやっぱり収斂進化ですかね？」

「しゅうれん？」

「よく似た環境にある地理的に分断されているの二つの地域で、別種の生き物の形が同じに形に進化することです」

宇宙を超えて、というのはさすがに想像の範疇外だったけど、アヤは心の中で付け足した。

「しんか、というの？」

男の不思議そうな顔に、アヤは軽く衝撃を受けた。まさかとは思うが、この世界には進化論が存在しないのか？

「えっと、進化というのは……」

「ああ、ごめん。今はちょっと忙しくて……また今度聞かせてくれるかい？それじゃ」

説明しようとしたアヤの言葉を遮ると、男は彼女の脇を通り過ぎ

て行ってしまった。

中庭には、アヤだけが残された。この世界には進化という概念がないのか？彼女は先ほどの衝撃の余韻を引きずったまま、目の前の本のページを次々にめくった。

本の中に、進化に関する内容は含まれていなかった。元の世界であれば、系統樹の一つも必ず載っているはずだ。目次や索引を見ても、それに当たる内容は見当たらなかった。

また、アヤは各生物の分類についても全く触れられていないことに気づいた。生物種は生息地ごとに分類されているだけで、その種がどのような生物群に属しているかについて書かれていないのだ。

彼女は本を片手に、図書室へ戻った。生物学関係の本をいくつか確かめたが、進化学はおろか、分類学についての記述すら見つけることはできなかった。

本の山の前で、アヤはしばらく考え込んでいた。しかし、やがて別の棚に行き、次々に本を開いていった。

アヤが図書室から出ると、空は既に赤く染まっていた。丸く切り取られた空には雲一つなく、赤い天井のように見えた。

吊い

部屋へと戻ったアヤは、扉に鍵をかけると、そのままベッドへだらりと横たわった。手足を大の字に開き、ぼんやりと天井を見上げた。そして、先ほど気づいたことについて考えた。

この世界の学問は、元いた世界の学問水準からすればかなり劣っている。薄々感じていたことではあったが、それは自分がまだこの世界について十分知らないためだという可能性もあった。しかし今日、彼女は図書室で、それが多くの分野についていえることであると確信した。

しかし、それは無理もないのかもしれない、彼女は思った。この世界には『魔術』という特異な技術と理論の一大体系が存在する。それは物質の性質を変え、遠く離れた時空をつなげ、無機質や生物までも操作することができる万能の術である。魔力に汚染され、人も資源も限られている中で一番に追求しなければならぬ学問、それは間違いなく『魔術』だ。

ただ、と彼女は睡魔に侵されつつある頭でぼんやりと考える。この世界の物理現象や物質などは元の世界とそれほど変わらない。モノを落とせば地面に落ちるし、太陽の移動に従って空は青から赤へと色を変える。彼女が元の世界で学んできた『科学』は、きっとこの世界にも応用できるはずだ。

眠りに落ちる直前、彼女の思考はこの一点に集中した。??私でも、役に立てることが見つかったかも知れない。

アヤの目が再び覚めた時、部屋の中はすっかり暗くなっていた。窓からは冷たい夜風が吹き込み、窓の戸をカタカタと揺らしていた。アヤは窓を閉めようと思い、のろのろと立ち上がった。窓辺に立った彼女は、その外に広がる光景に思わず息を飲んで立ち尽くした。空一面に星が満ちていた。沢山の星々が黒い空を覆わんばかりに

瞬いている。銀色の点描で描かれた川が正面の山脈へと続き、その柔らかな光が山の影をうつすらと浮かび上がらせていた。

今まで見たことのない光景に、アヤは窓辺に立ったまま呆然としていた。彼女はしばらく立ち尽くしていたが、やがてあることを思い出し、窓を閉めた。

フードの付いた長い上着を羽織り、薄いブランケットを脇に抱え、彼女は部屋を出た。静かに廊下を進み、階段を上がる。夜の城は昼以上にひっそりと静まりかえっている。足音と衣擦れの音が、昼以上に響いているような気がした。まるで肝試しみたいだと彼女は思った。しかし、そんな暗闇を明かりもなくひっそり歩いている彼女は、肝試しに来了子供ではなく、彼らを驚かす幽霊の方だろう。そう考えてアヤは一人微かに笑った。

階段の先にあるドアをそっと開けた。その先は城の屋上になっており、ぐるりと一週歩けるようになっていた。この場所はアヤの掃除担当場所の一つで、その眺めの良さは折り紙付きだった。元々高い丘の上に立つこの城は、この平原を一望できる場所にある。また、元々が砦として立てられているため、外周の三百六十度を見渡すことができる。昼間は何度か来たことのある場所だったが、夜中に来たのは初めてだった。

アヤはドアを閉め、空を見上げた。思った通り、すばらしい眺めだった。星空がドームとなり、彼女の上空を覆っていた。アヤは入り口の近くにあった石のベンチに座った。

「プラネタリウムみたい……」

天球を見上げ、彼女は思わず呟いた。夜空には雲一つなく、数え切れないほどの星で埋め尽くされていた。淡い光が微かに地上を照らし、その影だけを浮かび上がらせている。星が降るようだというのはこういうことなのか。都会の空しか知らない彼女にとって、それは初めて見る光景だった。

不意に、アヤの脳裏にかつて恋人と行った最新型プラネタリウムの記憶が蘇った。あれも良くできていて美しかったけれど、やはり本物の星空にはかなわない。天文学好きの彼のことだ。この星空を見たら、きっと喜ぶだろうとアヤはわずかに口元を緩めた。そして同時に、かつて自分が彼にした仕打ちを思い出した。自己嫌悪と後悔の念が彼女の胸に去来した。

?? せめてあの子と幸せになつてくれればいいんだけど、アヤは思う。最後まで私の側にいてくれようとした二人。しかし今の彼女には、彼らの行く末を知る術は存在しない。

あの二人に一度謝りたかった。私が死んだ（実際には死んでいないが）と知ったら、彼らはどう思うのだろうか? ……そういえば、両親のお墓はこれからどうなるんだろう? 私のアパートは誰が片付けてくれるのだろうか? あの研究はちゃんと実用化されたのだろうか? ……

二人のことをきっかけに、アヤの心に捨てたはず世界への思いが蘇ってきた。未練はないつもりだった。しかし、ずっと生きてきた世界には多くのしがらみが残っている。それを整理できていないことは、彼女にとってはいささか不満だった。綺麗に消える事なんてできないんだな、と彼女は苦笑した。

持参したブランケットを枕に、アヤはベンチに横たわった。視界全てが星空に覆われた。空を飛んでいるような、あるいは無重力の宇宙空間に投げ出されたような奇妙な感覚に囚われて、アヤは不安を覚えた。

一面の星空に彼女の知る星は一つもない。馴染みのない夜空は、彼女が異郷の地にあることをはつきりと突きつけた。私は孤独だ? ?この世界に一人きりだ、と。

ふと気がつくと、アヤは小さな声で歌っていた。彼女は思いがけない自分の行動に驚いて、一瞬声を止めた。しかし、この場所なら

誰かに迷惑をかけることもないだろう、そう判断して、アヤは再び歌い出した。

それはある映画で使われていた外国語の曲だった。その美しい旋律と映像は彼女の心に強い印象を残した。あまり音楽に興味のなかった彼女には珍しく、サントラCDを購入するに至ったほどだ。CDを聞き、彼女はもう一度衝撃を受けた。一見明るく爽やかなメロディーに乗って歌われていたのは、希望を失った心を描いた暗い歌詞だった。それ以降、彼女は歌詞を暗記してしまうほどこの曲を聴いていた。

以前のアヤは、どうして自分がこの曲にこれだけ惹かれたのか分からなかった。しかし、今の彼女にはその理由が分かっていた。

??歌われているのは私だ、私と同じような人たちだ。

アヤは死んだ自分の魂と、捨ててしまった世界のために歌った。それは、アヤ自身が歌う彼女自身のためのレクイエムであった。彼女の口からこぼれる小さな旋律は、そのまま夜と同化して消えていった。

再び静寂に包まれて、アヤはぼんやりと空を眺めた。彼女は世界と一体化したような感覚に囚われ、思った。この広い宇宙の中に、たった一つ小さな異物が紛れ込んだところで、一体何の問題があるのだろうか？

アヤは目を閉じ、口元を微かに緩めた。

そして、そのまま朝が来るのを待った。

願

ある昼下がり、アヤがいつものように中庭に行くと、男と猫が何やら議論していた。テーブルには何か液体の入った小さなガラス瓶が沢山並べられていた。二人はそれを杯に注いで匂いをかいだり、味見をしたりを繰り返している。

「こんにちわ。……何をなさっているんですか？」

アヤが声をかけると、二人は顔を上げた。男の顔はいつもより若干血色が良く、雰囲気は少しだけ明るい。

「やあ……酒の試飲をしてるんだ。君もどうだ？」

男はおどけたような口調だった。いつもと違う男の様子に彼女は少し戸惑った。

「発酵酒の保存方法を検討してるの。もっと長期に保存できる方法がないかって」

ティイが男に代わり答えた。聞けば、これも『課題』とやらの一つらしい。魔術って何でもありなのね、思わず呟いたアヤの言葉に二人はそうなんだよと言って笑った。どうやら二人とも少し酔っているらしい。

いつもと異なる陽気な雰囲気不安を感じて踵をかえそうとしたアヤに、一瞬早く男が声をかけた。座るようにと勧められ、アヤは仕方なく空いていた席に座った。

「……で、色々試してみた結果がこれだ」

男は一つ一つ瓶を取り上げつつ、何をやったのか上機嫌に説明した。解説を聞きながら、アヤも瓶と中身を観察した。

緑色の瓶を満たす液体は、赤ワインによく似ていた。実際、赤い果実を発酵させて作る酒らしく、少し甘ったるい匂いがした。アヤは恐る恐る少しだけ口に含んだ。やはり匂いから予見される味はせず、その風味はワインよりもビールに似ている気がした。また、ア

ルコールが含まれている感じはしなかった。多分、彼らは別の物質に『酔って』いるのだろう。

アヤは酔っぱらい達を観察した。男はいつもより饒舌で明るいし、猫もどうでも良いことでケラケラ笑っている。酔っ払いには関わりたくないなど、アヤは頭の片隅で考えた。

「酔っ払いとは失礼だな」

男の突然の言葉に、アヤはビクリと肩を震わせた。今のは、心を讀まれた？

「読めるって最初の頃に言っただろう？信じてなかったのか？」

男は実に楽しそうに笑っている。猫もニヤニヤしていた。アヤは何とか言葉を繋ごうと声を出したが、いえ、とかあの、とか短い言葉しか出てこない。

「この間は僕に侵入者だーってメッセージを送ってくれたじゃないか」

男のニヤリとした顔に、彼女は襲撃の夜のことを思い出した。そういえば、そんなことをしたような気がする。確かに自分の思ったことは男に伝わるらしい。しかし、それにしては……

「それにしては、何？」

「いえ、心が読めるなら私の気持ちとか考えとか、いちいち喋らなくても伝わるんじゃないですか？」

「まあ、ある程度は分かるよ」

「ある程度？心が読めるなら、もっとダイレクトに理解できるのでは？私もつたない言葉で色々説明する必要がないし……」

アヤがそう言うと、男は少しだけ困ったような顔をした。アヤは男の回答を待ったが、彼は杯を手にしてまた酒をあおり始めた。どうやら説明する気はないらしい。彼女は不満に思ったが、やがて諦めた。まあいい、時間はまだある。

「まあ、それはいいとして……それで、良い方法は見つかりましたか？」

アヤの問いに、それまで陽気だった二人が突然しゅんと沈んだ。
聞くまでもなく、ダメだったのだろう。

「これが、中々うまくいかなくてね……」

「そうなのよ。これで何年目になるかしら……」

男と猫は遠い目で空を見つめた。

「どうしても一定の割合で腐ってしまうものが出てきてしまう。何をやってもだ」

「グツグツ煮ちゃったものだけよ。まともに成果が出るのは。でも、味も色も落ちちゃってお酒じゃなくなっちゃうの」

ティイの嘆きに、アヤはふと思い出した。

「パストリーゼーション」

アヤの呟きに、男と猫が怪訝な表情を浮かべた。

「あ……えっと、低温殺菌法と言ったらいいのかな。高温処理が有効なら、低温で長時間加熱する方法も多分有効ですよ」

「低温で長時間？」

「そう、品質が下がらない程度の温度に保って、しばらく置いておくんです。その上で密封すれば、腐敗は起こりにくいはずですよ」

「……どういう原理だ？」

男が眉をひそめて尋ねた。表情は険しく、少し怖いくらいだった。
「単純な話です。腐敗はそのお酒に含まれた微生物によるものです。だから、加熱することでその菌を殺してしまつて、それから封をすれば腐敗現象は起こりません」

「びせいぶつ、とか、きんつて何よ？」

ティイが無邪気な口調で聞いた。いつもより素直で可愛いなあと、アヤは少しだけ思った。

「目には見えない微小な生物ですよ。そのお酒の中にもたくさん含まれているはずですよ」

「目に見えないほど小さな生き物？そんなのいるわけないじゃない」
アハハと猫が笑った。つられたのか、男も笑っている。アヤは少し腹を立てたが、反面、知らなければこんな反応だろうとも思った。

「多分いますよ。この世界の生き物は、私の世界とよく似ているから。顕微鏡……小さいモノを拡大して見られる道具を作れば分かります。??同じような問題は私の世界にも起こっています。でも、この方法で解決されました」

きっぱりとしたアヤの言葉に、男が笑うのを止めた。心を読んで、彼女が本気で言っていると理解したからだろう。

「……試してみるよ」

「本気ですか？旦那様」

ティイが笑い転げながら言った。この猫は笑い上戸なのだろうか。アヤはそのおかしい様子を目の端で捕らえながら思った。

「うまく行ったら、もうちょっと詳しく教えてくれるかな？」

「もちろんですよ」

半信半疑という風情の男の様子に、アヤはやや落胆したが、始めはこんなものだとしきを取り直した。彼女の様子に、男が不思議そうな顔をした。

「……君は何をする気なんだ？」

「私にしかできないことを、です」

アヤはそう言って笑った。私にしかできないこと、それは、彼女の世界の知識をこの世界に伝えることだ。せっかく長い間勉強ばかりしてきたのだ。自分の知識や知恵がこの世界に通用し、影響を与えるか試してみたい。それは彼女が初めて抱いた自分自身の願いだった。

アヤは静かに席を立った。男は彼女の内心を読んだのかそうでないのか、不思議そうな顔でアヤを見つめていた。傍らではまだティイがゲラゲラと笑っていた。

「じゃ、あんまり飲み過ぎないようにして下さいね」

「ああ」

男の言葉を背に、アヤの姿は図書室へと消えた。

男はその背になぜか不吉なものを見たような気がして、それを振り払うように杯をあおった。

願い（後書き）

とりあえず一章終わります。

ここまで読んでくれた方、ありがとうございます。

これでひとまずアヤの話は終わります。

ここからは男側の話になります。

理想的な死体

男は床に手を付け、口の中で何かを呟いた。石造りの部屋の中は殺風景で、壁や床に書かれた文字が異様な存在感を示していた。男の呟きに合わせ、床に描かれた陣の一つがうつすらと光を帯びた。やがて男の足下に青い光が広がった。青い色は徐々に黒くなり、やがて星空になった。男の意志に合わせ、足下の光は移動し変化していく。

男は星空の中、緩い魔力の糸を手繰るようにして、無限にも思える空間を巡って行った。彼の意識はいくつもの灼熱の巨大な星や凍てついた彗星、無数の岩が浮かぶ一帯、多くの衛星を従える惑星の脇を通り抜けていく。

空間に魔力の糸を残したのは偉大なる神々だという。遠い昔、彼方からやって来てこの世界に魔力をもたらしたという神々。彼らは星々を巡り、ある星には慈悲を、またある星には破滅を気まぐれにもたらしていた。魔力の痕跡を追いかけることは、彼らの足跡を辿ることだった。男は神々に壊された星や、数多の異様な構造物を見た。

糸の先をずっと辿っていくと、やがて暗く何もない空間に出た。そこにあるのはただ虚無だけだった。常人ならその存在に触れるだけで理性を失ってしまうほどの無。人の理解を拒むその空間にも、でたらめな神々の痕跡はまだ続いている。男は迷わずそれを追いかけた。通り抜けたその先に、また物質が溢れた。

ふと気がつけば、水の中だった。

??また戻ってきてしまったのか。どこで失敗した?

男は自分の術が失敗し、自らの星へ帰ってきてしまったのだと思い、嘆息した。しかし、手にした糸はいつもとは違い、確かに先ほどの続きだった。周囲を注意深く観察してみれば、そこが別の星で

あることは明らかだった。何しろ魔力が存在しないのだ。あるのは男が辿ってきた神々の痕跡だけで、この世界は魔力で満ちてはいない。

もしやここが「果て」なのか？　そう思い興奮した男の視界に、黒い影が映った。彼が視線を向けると、そこには人間がいた。

「水中に住む人間？」

彼の眩きと同時に、その人間が目を開けた。一瞬その黒い瞳と目が合い、自分の眩きがそれに届いたのかと思ひ慌てた男だったが、それは間違いだとすぐに気づいた。目を開けたそれは苦しい表情で手を伸ばし、泡を吐いた。

？？死にかけている？

それが溺れかけていると気づき、男はその様子を観察していた。それは周囲の水の流れに翻弄されて、いたずらにもがいていた。口や鼻から時折大きな泡がこぼれ、そのたびに顔は苦悶に歪んでいた。やがて力尽きたのか、それは動くのを止めた。しばらくそれを見つめていた男だったが、ふと頭にあることを思い出した。そして新たに何事か呟くと、その手を床に差し入れた。

手がそれに近づいた瞬間、完全に動きを止めていたそれは突然目を開いた。驚いて男はとっさに手を引こうとしたが、それが自分に向けて腕を伸ばしていることに気づいた。彼はそのままその手を握った。

次の瞬間、陣はもうただの文字に戻っていた。男は握りしめた冷たい手を放した。冷たい石の床には拾い上げたばかりのずぶ濡れの体が転がった。その体はもうぴくりとも動いていなかった。

「ティイ！　いるか？」

男は声を張りあげた。

「はい、なんでございますか」

扉から一匹の猫が入ってくる。猫は床の上の見慣れぬ物体に顔をしかめた。

「何ですか、それは？」

「死んだばかりの新鮮な、理想的な死体だよ。あの術を試す。準備を」

「どこから持ってきたんですか」

薬品や道具を準備しながら猫が尋ねた。

「遠い遠い星々の彼方から」

男は楽しみに答えた。実際、彼はいつになく上機嫌だった。いつも失敗していた「その先」まで行くことが出来た。しかもその上、物質の転送という更なる術までこなして見せたのだ。目の前に横たわった死体は彼の戦利品だった。今日のような良い日なら、きっとあの秘術も成功させられるんじゃないだろうか。珍しく浮かれる男に、猫は密かに苦笑した。

「……この方、魔力を帯びていませんね」

猫が首をかしげた。

「そうなんだ、これのいた世界には魔力はなかった。あれの痕跡は確かにあったのに」

男は刃物で死体の服を切り裂きながら答えた。

「何で溺れていたんでしょ？ まさか川に流された罪人では」

「それはないんじゃないか。手かせも足かせもついてないし……つて、あれ」

素っ頓狂な声と共に男の手が止まった。

「どうかしました？」

猫は怪訝な表情を浮かべて男を見つめた。

「……これ、女だ」

死体の切り裂かれた服の合間からは、二つの丸い膨らみが覗いていた。

男と猫は顔を見合わせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6709v/>

魔術師と生き人形

2011年11月27日22時59分発行